

---

# ネギま！ 武偵が転生した？

another

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギま！ 武偵が転生した？

### 【Nコード】

N6661P

### 【作者名】

another

### 【あらすじ】

俺たちは任務中の不注意で死んだ・・・はずだったんだよ！

だが突然気がつくと見知らぬおっさんが神と名乗りだす次第。

何が何だかわからん！

神と名乗るおっさんが転生させるとか言い出すし！

やってられねえ！

設定を見直し、新しく書きなおします。

本作はオリ主最強・多少のハーレム（予定？）・文章の読みにくさ・文章の端折りががあるのでそれらに耐えられない方・チートなど邪道

!!などと思っている方はブラウザバックを推奨します

## プロローグ

さて、どうしてこうなったか説明しよう。

俺たちのチームは窃盗団のアジトをたたくってという任務をしていたんだ。

俺と相棒のユリアで先に突っ込んだんだがこれが失敗してな。

敵が投げたスタングレネードをともに食らった二人はそのあとハチの巣にされたんだ。

「わ……な……だ、につ……げ……ろー！  
！！」

俺はインカムにそう叫ぶと意識がなくなって目の前が真っ暗になった。

「「っわああーっ！っ！！」」

がばっ！と起きるとそこはなんて言うか白を基調とした西洋の城みたいな部屋だった。

ユリアがなぜここにいる？そしてなぜおれ生きてる？謎が謎を呼ぶこの事態……。誰かチビツ子名探偵を呼んでくれないか？

「ん？んー？」

年齢は初老くらいと見受けられるおっさんがそこに座っていた。

「なあおっさんここどこで、なんで生きてるかわかる？」

「ここは神の城で、お前が生きているのは神の前にいるから」

「正確には生きてるんじゃないくて、魂の姿と言っ正しいだろう。」

「ああー、魂ね魂……。ってそんな話あるわけがないだろ（笑）」

「このまま死神に引き渡そうか？」

「すいませんでした。」

「はあ……」

「なんじゃ？溜息なんぞつき追って、妙に似合うではないか。」

「苦労してきたので。」

「そつえばなぜここに呼んだかわかるか？」

「わかりませんよ」

「それはな、ちよつとした手違いで君たちは死ぬ運命ではない所が死んでしまったのでな。その詰も滅ぼしのつもりで転生させてやろうと思つたのだ。」

「死ぬ運命じゃないってことはもうちよつと生きられたってこと？」

「そういうことじゃが、どうも変な奴が干渉して来て君たちの運命が捻じ曲げられてしまったのじゃ。」

「へえ、その誰かはわかつてないの？」

「わかつてはいるが干渉できんだ、代わりと言つては何がだが転生と能力をつけて送つてやろうかと思つたのだ」

「へえ、どんなの付けてくれるの？」

「そうじゃな、何がいいかね？」

「錬金術つけてくれよ、あと焰の大佐の錬金術も付けてよ。あとはなんでもいいよ」

「それだけか？もうちよつとつけてもいいんだぞ？」

「あとはそちに任せると言つたんだ。」

「そうか……。ならこの世界における英雄ナギ・スプリングフィールドと同じだけの魔力をつけよう。」

「他には？」

「まだつけると言うのか？」

「どうせならいっぱいあつた方がいいじゃん。」

「そうじゃな」

「大空の死ぬ気の炎なんかもつけてやろうか」

「なにそれ？」

「リボーンを読め！」

「わかつたよ。俺から1つだけいいか？」

「ユリアを連れていきたい。」

「ほーう？なぜだ？」

「面白くなりそうだから。」

「それでは制約をつけよう。お主ら2人の性別を反対にする。」

「なんだと!!」

「それぐらいいいだろ？あと君たちの記憶と装備品などはそのまま引き継ぐことにしよう。」

「なら蛇大佐もつけてる無限バンダナを3本くれ。」

「それぐらいなら願いの内には入らんがつけてやろう。」

「ありがとう、神様。」

「では気をつけてな。」

「おうよ。」

「出口はあっちじゃ。」

神様は指をさす。

俺たち二人は新しい世界へと踏み出した。

## プロローグ（後書き）

並行世界で死んだ京輔とユリアが大冒険するって感じですよ。

## 主人公設定 +

2011年3月28日修正

### 主人公

名前：村雨京輔@転生前

性別：男

身長：176cmぐらい

体重：68kg

備考：詳しくは緋弾のアリア *g r a c e* をご覧くださいませ

名前：マナ・スプリングフィールド@転生後

性別：男

身長：146cm（卒業時

体重：32kg

趣味：裁縫・仕立て（服や装飾品から靴までなんでも）

備考：かの英雄ナギスプリングフィールド（次に呼ぶ時は略称：ナギと呼ぶことにします。）の残した子供のうちの1人。

ナギよりも魔力が少なく4分の3程度の魔力量を持つ。

目はアイルと同じくダークグレー髪の色は金色

魔法属性：得意な属性は左から氷、雷、風、影

- 神からの贈り物 -

1：鍊金術はエド式を使えるようにしてもらった

2：相手の術式を解析するだけの眼@これは神が本人には言わずに送ったいわば本当の罪滅ぼし。

3：無限バンダナ@これはMGSシリーズに登場するあの無限バンダナととらえてくれれば幸いです。

名前：広瀬ユリア@転生前



性別：女

身長：162cmぐらい

体重：秘匿

備考：詳しくは自分のブログにて掲載しておりますゆえそちらをご覧くださいませ

自分のブログ <http://another-third.blogspot.com/>

名前：アイル・ヴァインベルグ

性別：女

身長：144cm前後

体重：秘匿

趣味：読書・料理

備考：紅き翼の知られざるメンバーの息子という設定。

一応ナギと同じだけの魔力を持ち合わせる。

髪の色はアイスブルー。目はダークグレイと言った所

魔法属性：雷、影、氷、風、火

- 神の贈り物 -

1 錬金術はエド式を使えるようにしてもらっており

2 相手の術式を解析することができる眼@これも神が本人に  
言わず付けたもの

3 エアトレック@これは本人たつての希望の品。三足あるらしい。  
エアギアのあのエアトレックだと思ってくだされば幸いです。

設定を見直した結果こうなりました。

20年前創造主との決戦に勝ち、広域魔力消滅儀式を止め英雄とも  
てはやされた。だがしかし、首謀犯としてとらわれたアリカ姫だが  
処刑当日のそれこそピンチにナギが現れ姫を救ったとき。（次から  
はオリジナル設定になります）

風の噂ではアリカ姫はボンゴレというマフィアのボスで先代が魔法

世界に逃れ国を作り王族になったのではないかなどと実しやかにささやかれている。つまりアリカ姫は死ぬ気の炎が使えてボンゴレマフィアの14代目なんじゃないか？という噂なのだから。というか使える。

ネギはアリカ姫よりもナギに似たため死ぬ気の炎が使えない。使えたとしても実践じゃ使えないレベルでマナの方はナギよりもアリカ姫に似たため死ぬ気の炎が使え、しかも炎の放出量がすさまじい。

以上がオリジナル設定と見直した点でした。改善した点は下に書いておきます

主人公設定 + 2011年3月28日修正（後書き）

死ぬ気の炎が遺伝にしたと言っ点と  
性別とアリカ姫の出自について。

## 第一話

こんちわ。いやいや、こんにちわ村雨きよ・・・いやいやマナ・スプリングフィールドです。

前の記憶とかが鮮明すぎて自分がまだ村雨京輔だと言う風に思ってしまうことがある今日この頃。

神様もよくやってくださいますよね、「スプリングフィールド」ですってよあの英雄の妹に生まれさせてくれるとはいじわるが過ぎるのではないでしょうか？

自分の意識がはつきりしたのは1歳半ぐらいで、そのころからちよつと飛ばして3歳ごろには自分で歩いていたりしたね。6歳ごろにはもう前の体に近い状態にしたかったので訓練してましたよ。ネカネお姉ちゃんは今私が夜中出ていくことを黙認してくださったおかげで結構自由に訓練出来ましたけどね。

（たぶん散歩だと思ってたのでしょうが）

そして事件が起こる。これは神様が言っていたことなので一応現場にはいましたが巻き込まれてアーニャちゃんの母君にかばっていただいたおかげで自分は生き延びた。

アーニャちゃんの母君は「幸せになれ」とおっしゃっていましたが自分にはできません。スタンさんやアーニャちゃんの母君が犠牲になったのに自分だけ幸せになるなんて私にはできない。それなら私はいばらの道を無理しても歩く。それが自分の決意だ。

それから私とネギ兄さんは魔法学校に入られました。

ネギ兄さんを見る目は英雄の卵を見るようなもの私もその眼で見られていた。それが一番嫌だ。その眼を何とかしてほしい。立派な魔法使い？マギステル・マギなんてどうだっていいじゃない、歴史上の人物は正義を振りかざしたばかりに倒れていく人だって多いのになぜその道を選ばされなければならないのか？自分にはよくわかりません。

## 第二話

魔法学校に入れさせられてからと言うものいい思い出など一度でもあつただろうか？

頂いた無限バンダナは腕に巻きつけリストバンドが代わりにし身につけてはいますが、このバンダナを使う機会はあるのだろうか？一応前世から持ってきているベレッタ90two2丁をいつも持つて着てますけどね。護身用ですよ護身用。

話がそれましたね、戻しましょう。

紺色の髪であることがいけないのだろうか？魔法がうまくないだけでなぜこんなことになるのだろうか？私はトイレにつれていかれ水をぶっかけられ蹴られながらそう思っていた。

力があればなー……。コントロールとかできればそんな風にならないのか？魔法をうまく使えればいじめられないのか？それならばやってやる、やってやるよ。復讐含めてやってやる。貴様ら覚悟しろ私がお前らに地獄を見せてやる

それからの私は睡眠時間は3時間以外ほぼ魔法のコントロールと呪文を覚えるだけに費やした。

授業中に出された課題は時間中に終わらせ、そして魔法具などの勉強は放課後の2時間だけで終わらせる。それが私の日課となっていた。

そして卒業式前日。

復讐実行の日だ。

私の銃は魔法を込めるだけで弾速を変えられるようにしてあるからな。覚悟しろ蟲野郎どもめが……！

そう思っていると私の額からオレンジの炎が噴き出し始める。神様から渡された手袋がなぜか模様やら形状やらが変化して光っていた。君も力をかしてくれるのか？ありがとう君の力は大事にするよグローブをはじめイクスバーナーの構えを取り柔の炎を後方に噴射し、

剛の炎を収束させ怪我押させない程度にためる。

覚悟しろ、蟲野郎！！

「イクス・・・バーナーっ！！！」

うねりを上げて迫る炎に生徒は逃げだすが遅い、はるかに遅い！

着弾し背中が見えて煙を上げていた。やけどぐらいで済んだお前の幸運に感謝しろ。下種が！

そして時系列は卒業式。

「卒業証書授与　この七年間よくぞ頑張ってきた、だがこれからの修行が本番だ気を抜くでないぞ」

「ネギ・スプリングフィールド君！」

「はい！」

無駄に元気がいいな、どうしたの？いいことでもありました？

眠い、こういう式典ってどうして眠くなるのだろうか？その原理を研究して発表したら面白くなりそうだ。そして最後の私の番がきた。

「マナ・スプリングフィールド君！」

「はい」

「卒業おめでとう。」

「・・・。」

「君には申し訳ないことをしたね。」

「ふん。」

小声で話してくるがそれはどうだっていいんだ。なぜ放置したかが重要なんだよ。校長先生。

立ち位置に戻ると速効で開く。そこには

「A teacher in Japan.（日本で教師）」

と書かれていた。もとは日本人だから習わなくてもいいけどさ。

そして兄さんも同じのようだ。

校長室にでも行って抗議しに行こうか

ノックをする。マナーは大事だからな

「校長、いつ日本に赴けばいいんですか？」

「そうじゃな、2月ぐらいだな」

「準備ができ次第行きたいのですがよろしいですか？」

「ふむう・・・、理由を聞こうかの」

「あまりいい思い出がないのは承知の上かと」

「すまなかつたな・・・。」

「それでは失礼しm「校長！先生ってどういうことですか！」

私のセリフはさえぎられてしまった。

「マナ・・・あなたは？」

「日本で教師をすること。だそうです」

「ネギと同じだけど、10歳に教師なんて無理です！どういうことなんですか！校長！」

「そうよ、マナはいいとしてネギったらただでさえ、チビでボケで・・・。」

「卒業証書に書かれたことは決定事項じゃ。」

「安心せい、修業先はワシの友人の所じゃ。二人とも安心して行きなさい」

「「ハイ（！）」」

「それとマナ君はちよつと話があるからちよつと残りなさい」

「失礼しました。」

とネカネ姉ちゃんと兄さん・アーニヤちゃんは退出する。

「それで何用ですか？」

「そう邪見にするでない・・・。生徒が襲われたのはマナ君がしたことか？」

「そんなことしてませんよ。」

「そうか、ならいいのじゃが。」

「それだけなら失礼してもいいですか？」

「あと！これを渡そうかと思ってな。」

手にはペンダント型の最高級魔法具があつた。

「なぜ私に？渡すなら兄さんでしょう？渡してきますね。」

「君のいじめがわかっていながら申し訳ないことをした。その罪滅ぼしだと思って受け取ってくれないか？」

「私がいついじめられていたんですかね？そんなの誤認じゃないですか？でーすーがー、ありがたく受け取っておきます。」

「失礼しました。」

扉を閉め、私は急いで出発準備をする。

最低限のものをバッグに詰め翌日に出発しよう。

そうだ、アイルの所に行つてあの便利な靴をいただこう。

隣の家のアイル家に向かい扉をたたく

「はーいって、マナどうした？」

「あの便利な靴一足頂けないかな？」

「いいよ、こっちに来てよ」

「お邪魔します」

「はいこれ！」

「ありがとう、大事にするよ。」

「あと気をつけてね、日本はいい所過ぎるからさ。」

「わかつてる。じゃあね」

「行つてらっしゃい！」

その靴は黒を基調とし黄色と白で構成された車輪のついた靴。エア

トレックと言つらしい。

私はその靴をバッグにつめる

紺色の白衣を忘れちゃいけないな、この白衣には魔法をかけて金属

探知で反応されないようにした。

明日は出発だ・・・。

翌日

空港で搭乗便を待っているとネカネ姉さんが走ってきた。

「マーナー!!!」

「ネカネ姉さんじゃないですか、兄さんの世話してなくていいですか？」

「今はあなたでしょ？」

「そうですね、兄さんによろしく言っておいてください。」

「わかつたわ、それから」

便に御乗りの方は発着口ま



でお急ぎください。」「そろそろ見たいね、行つてらっしゃい。」「

「はい、行つてきます。」「

私は発着口に向かい歩きだす

「それからー！気付いてあげられなくてごめんね！！！」

涙で震えながら言わないでくださいよ。

私は背を向けたまま手を振つてこたえる。振り返ると涙がこぼれそうだったから。

### 第三話

さて、到着したはいいいものの・・・広いよ。迷うこれ  
どこなんだorzとりあえず奥まで来たものの迷うって。移動手段  
はあるからいいけど

実験としてエアトレックをはいて回ってみるか。確か説明によれば  
押す力によりスピードが決まるとかなんとか・・・。  
思いっきり踏んでみた。

「うわーっ！」

いきなりすごいスピードでびっくりした・・・。

ああ！目の前に階段がある！あ、手すりに乗ればいいじゃん。

私は思いっきりジャンプ！手すりに乗り上へと駆け上がる

電柱がある！思いっきりトリック決めるか！

アッパースウル！

空に背を向け電柱を回転しながら登り電柱のほぼ上まで登ると手を  
離し地面に着地する。

「「「おおーっ！」「」」

歓声とともに拍手を受けてしまった。

「すごいね！何その靴！ちよつと見してよ」

「ちよつとそれは・・・。」

「ねえねえ！何かしてたの？にしても小さいけどここ中学校と高校  
しかないよ？」

「スポーツとかしてたの？」

「あの！ちよつと静かにしてもらっていいですか！」  
シーン・・・。

「麻帆良学園中等部ってどこですか？」

「それなら私が案内するよ！」

「ありがとうございます、助かります。」

「お久しぶりでーす！マナ君！」

「ケツ」

小さく毒づく

「お久しぶりです、高畑先生」

「あの案内ありがとうございました、コレ使ってみてください。」

コレとはタバコのようにしたハーブだ。

「タバコ？こんなものもらえないよ」

「大丈夫です、ハーブですから。」

火をつけて臭いをかいでもらうと

「本当にハーブみたいだね、ありがとう。もらっておくね」

「リラックス効果が得られるので勉強に息詰まると使ってみてください。」

「じゃあね！」

「では失礼します。」

しゃーっと私は走り出す。降りて来たのか高畑先生が職員玄関から出てきた。

「大きくなったね、マナ君」

「お世辞はいいので学園長室に行きたいのでご案内を頼めますか？」

「お世辞じゃないのになー。」

苦笑いをする。あんたは大嫌いだから気にするな

色々世間話とは言っても私は大した返事をしないので会話はすぐに終わり学園長室の前きた。

「失礼します。」

「どうぞ。」

後頭部が長いのような人物がこちらを向いていた。

「あー、妖怪が学園長とはこの学校は終わりですね。」

「こら！マナ君、この人は人間だよ！後頭部が長いのは事実だけど」

「よいよい、そして君のことは何と呼べばいいかな？」

「なんとでもどうぞ」

「よろしい、ではマナ君よくぞいらしたな。修行のため日本で教師とは大変じゃろうが頑張りなさい。」

「はい」

「これから三か月・・・いや五カ月ほどの。教育実習生として働いてもらうからの」

「わかりました。」

「でどこに住めばいいんですか？」

「そうじゃな・・・。女子寮の管理人室が空いてるはずじゃからそこにでも住んでもらおうかの」

「あと担任を頼もうかの。」

「では後は高畑君、マナ君を頼んだぞ」

「はい学園長」

「では行こうかマナ君」

「はい、失礼しました。」

まったく、何考えてるかわからないし、英雄の子供っていう目で見ているのが一番気に入らないな。何か問題があったとき極限まで追いつめてやる。覚悟しろ・・・。

私は管理人室に案内され、荷物を置いた後革靴に履き替えたあと紺色の白衣だけ取り出し教室へ向かう

「その白衣はどうしたんだい？」

「これは私が作ったものですが、気にしないでください」

「結構いい素材使ってるんだね、肌触りがいい」

「そうですね、素材には気を使いなおかつ爆発などに耐えられるようにしたのでそこそこぐらいですかね。」

「これでそこそこって・・・。」

それいら黙ってしまった。

「ではマナ君・・・いやマナ先生これを」

クラス名簿を渡される

「クラス名簿・・・」

「では頑張つてね、マナ先生」

ハァ……。いきなり黒板消しトラップ……。洗礼ですか、これはガラガラ・・・落ちてくる黒板消しを　バスケットボールを

回す要領で回しながら受けてめた後ワイヤーを踏み落ちてくるバケツを脚のつま先で受け矢をバケツで受けてめた。

完璧！私すげー！

「……………おおおー！！！！」

本日二回目の歓声と拍手

ゆっくりとつま先からバケツを下ろし回しながら歩いて黒板消しを置く

「初めまして、新しく担任になりましたマナ・スプリングフィールドです。担当教科は理科です。よろしくお願いします。」

「何歳ですかー！どれくらい頭がいいん」  
「ああー！代表して新聞部朝倉和美が質問してもいいですか？」

「どうぞ、答えられる範囲でお答えします。」

「では失礼して、ゴホン。まず先生は何歳ですか？」

「数えて10歳ですね。」

「おおー若い…。なんで紺色の白衣なんて着てるんですか？」

「紺色の理由は白だと普通すぎて面白くないからです。」

「どこ出身ですか？」

「イギリスのウェールズと言う所で生まれました。詳しくは調べたりしてください。」

「頭いいんですか？」

「一応大学卒ぐらいの学力はあると思います。」

「質問はそれだけですか？」

涼しい顔をして答える。

「質問は以上です！ありがとうございました。」

礼儀正しいね、礼儀って大事だね

「では授業を始めます、ですがその前に・・・レクリエーションでモしますか・・・。」

「……………イエーイ！！！！」

「ふむ・・・、レクリエーションって言うてもなー・・・。」

「何するんですか？」

「手品をしようかと」

「「「「「おおおー！！！！」」」」」

ポケットに手を入れメモ帳を取り出す。

「ここに何も仕掛けのないメモ帳があります。誰か確認していただけますか？」

「「「「「ハイハイハイ！」」」」」

「私私！！」「いや私が！！」「それはわたくしが！！」

三者三様ですね。

「では綾瀬ちよつと確かめていただけますか？」

「あ、はい。」

「なにもないですね・・・。」

「そうですね。」

「ではこれを手のひらに起きクシャリとくしゃくしゃにし手の中に詰めます」

「1、2、3・・・はいできました。」

「ハンドガンです！」

「「「「「危ないけどすごい！！！！」」」」」

「大丈夫です、エアガンです。ではこのエアガンを大量に出してサバイバルゲームをしていただきます！」

### 第三話（後書き）

今回はこれぐらいで。

次はサバイバルゲームの模様を描きたいと思います。

## 第四話

「参加者は教室の右側に集まってくださいーい」

ドタドタドタ。

「参加者確認をします、名前を呼ばれた人は返事してくださいね。」

「明石裕奈さん「ハイ！」早乙女ハルナさん「はい！」古菲さん「はいヨ！」佐々木まき絵さん「はい」竜宮真名さん「はい」超鈴音さん「はい」長瀬忍さん「はい」鳴滝風香さん鳴滝文伽さん「ハロー！」以上9名でいいですか？」

「「「「「「「はい！」「」「」「」「」「」

「では朝倉さん、確か廊下などには監視カメラがあったのでそのネットワークを使って実況お願いできますか？」

「ハッキングですか？」

「実はもうハッキングしてあるので実況だけです。」

「いつハッキングを！」

「それはひ・み・つ・ですよ」

「あ、あとハッキングのことは秘密にしておいてくださいね、よろしくー！」



「9名じゃキリが悪いので私も入ろうかと思っています。」

「それは卑怯じゃ……。」

「大丈夫ですよ。」

「ルール説明ですが、ルールは一つ。当たったら即失格、教室のお戻りください。以上です。それでは二つのチームに分けます。」

「公平性を考えて……。佐々木さん・超さん・古菲さん・鳴滝風香・文伽さんがAチーム、竜宮さん・長瀬さん・明石さん・早乙女さん・私のチームがBチームになります。」

「メンバーの確認はできましたか？」

「……………できました!!」「……………」

「それではメンバー分のインカムを用意したのでこれで連携・連絡ができます。皆さんどうぞ」

「用意がいいねー。」

「それほどでもないです／＼／」

「とりあえず校舎全体がフィールドになります。」

「それでは皆さん校舎に散らばってください!」

私の合図で皆さんは校舎に散って行った

朝倉さんにもインカムが渡してあるのでそのインカムからスタートの合図そして今のメンバー状況などが伝わってくる仕組みだ。

「さて、皆さん相手は素人とはいえ運動神経がいい3人がいますので気をつけてくださいね。」

「そんな先生こそ大丈夫なのかい？」

「舐めないでいただきたいですね。」

「それは良かった。」

「あと竜宮さん、これをどうぞ」

「この古びたバンダナは？」

ここからは耳打ち

「この無限バンダナといって、弾薬がいらなくなるんですよ。夜の警備の時に身につけてみてください。その効果はわかるはずですよ。」

「ありがたく受け取っておくよ」

ここで耳打ち終了

「何の話でござるか？」

「いえいえ何もありませんよ、このインカムをつけてマイクを調節してください。じゃないとしゃべったときに耳がつんざかれますので。」

「それではみなさん！準備はいいですか？校内サバイバルゲーム・  
・開始！！」

「二手に分かりますよ！」

「竜宮さんと早乙女さんは私についてきて、明石さんと長瀬さんで別れますよ！」

わかれたものの…。相手の実力がわからないからなーどうしよう。  
とりあえず構えずに行こう。

現在は三階の廊下を歩いている。

すると向こうから鳴滝姉妹と古菲さん達が現れた。

「先生たちにはここで倒れてもらうアル！！」

パパパパパッ！

とりあえず私を狙ってくるか……。深呼吸……。スウー……。  
・ハア……。・・・。

「先生！深呼吸してる場合じゃない！」

「大丈夫ですって。」

銃弾撃ち ビリヤード でBB弾の軌道をそらす。しかも全弾

「なっ！」

「大丈夫だつて言つたでしょう?」

とりあえずベレッタ90twoの弾がなくなったからナイトウォーカーで反撃しようか。

「反撃ですよ!!」

「きついアル!!」

「反則技ですー!!」

「反則なんてのはこういうことを言つんです!」

4丁をジャグリングしどんどん弾を打ち出す。

2丁しか弾が込められていないので打ち出した弾は34発

打ち出した弾はわざと外しながら足元に打ちこんだり、壁に打ちこんだりして撤退を促す

「撤退アル!!」

「了解!!」

そついい逃げて行つた。

「先生ほどの腕前なら当てることなんて簡単なんじゃないのかい?」

「そつしたらつまらないじゃないですか。」

「ついていけないよー・・・。」

大丈夫、大体は私が片づけられるから。

「おおーっと！先生チームは古菲・鳴滝姉妹を退ける！これは先生チーム有利か！？」

実況が流れ出す。

「おっと！Bチーム長瀬・明石組に動きあり！Aチーム佐々木・超組に押されている！そこにAチーム鳴滝姉妹・古菲組が加わり劣勢へと傾いている！！」

「先生・竜宮・早乙女組はどうするつもりなのでしょうか！！」

「それは決まってる・・・。総力戦です！！長瀬さんがいる限り、佐々木さんは大丈夫でしょうからね」

「そうだろうかね？」

「わかりませんが、やられたとなれば全力をかける限りです。」

「頼もしいね、先生」

「ついてけないー！！」

悠然と歩きだす私と竜宮さんとは違い早乙女さんはおろおろしてるが気にしない。

5分後戦闘現場到着。ずいぶんぶっ壊しましたね。結構傷入ってる

じゃないですか。どやされたくないからさっさと戻しますかね。もちろん授業途中で。

「長瀬さん良く持ちましたね。大丈夫ですか？」

「結構きついでござる。」

「加勢は？」

「おねがいするでござる」

「だそうですけど、Aチームのみなさんはどちらを狙うんですか？  
こっちはあなたがたを挟撃の形になってますけど。」

「クー！長瀬達を頼むヨ、私は先生たちを相手にするアル！」

「わかったネ、超！」

リロードが済んでいる私に隙はない……。はず！

「早乙女さん、銃を貸していただけますか？」

「あつ、はいどうぞ」

「ありがとうございます。」

早乙女さんに貸した銃は2丁。私が持っている銃は4丁…。ジャグリングはきついけどまだなんとかかりますね。

「ジャグリングとは奇怪アルネ」

「そうですか？奇怪とは手厳しい」

ふむ、この子は身軽だから壁をけってきそうな気がする。

「そろそろ覚悟してほしいアル」

「いつでも出来てますけど？」

「では行かせてもらうアル！！」

そついうと壁をけり上へ飛び打ち込んでくる。

こちらの戦力を失うわけにはいかない。守らせて頂きます！

相手の撃ってきた弾全弾を銃弾撃ちで軌道をそらし当らない方向に  
そらす、足の甲を狙うが全然当たらない。

巧みにかわしてくれるよ。そつじやないと面白くない。

こちらは6丁つまり1丁につき17発程度だからかける6だから1  
02発。これだけあればなんとかなる。

全部ホルスターにしまって相手の動きをみる。こちらが撃った弾が  
全部よけられたから出方を見るだけだ。

「どうしたアルカ？先生」

「当たらないとアウトにできませんからね。」

「かわして見せただけアル」

「存外当たるかもしれないネ？」

「かもしれないネ」

「今度は先手譲りますよ。」

そう言い放つと目を閉じて深呼吸…。

息を整え相手の発砲を待つ。

「それならお言葉に甘えさせていただくアル!!」

ダッ  
!

今度は走ってきたか。だが人間のリミッターを外した私に隙はなかった

「甘いなあ、砂糖より甘いです!!」

「甘くないのは仮想世界、甘くないのは現実アルヨ!」

「言えてますねえ!!」

パンパパパパパ

相手は2丁とはいえ油断はできない。超さんはジャンプし体を回転をさせ上段回転蹴りを放ってくる、だがこっちは足に向けて発砲。そんなのは五年前から呼んでいたかのようにかわしこちらに応戦し



てくる。銃弾撃ちでそらし、次の弾を送り出すとその弾に気がつかず手の甲にあてて丁さん撃破

「あいやー、油断したヨ」

「中々強敵でした。」

「先生は筋がいいな、何かしていたのかい？」

「そんなまさか」

などと会話を交わしつつ竜宮さんが大体片づけていた。

長瀬さんと佐々木さんは弾が当たったのかその場にいなかった。

「ゲームしゅーりょー！！勝者チームはBチーム先生組の勝利！！早乙女ハルナ選手は全然役に立っていなかったが気にしない！！」

「何よー！こんな勝負に入れるわけがないでしょー！！」

「なんで拳手したんですか・・・。」

「アハハハ^^」

「先に戻っててください、掃除とかしなきゃいけないので。」

「ありがとう、先生。楽しかったよ」

「いえいえ、コミュニケーションとしては十分でしょう？」

「そうだね。」

会話を交わした後生徒たちを教室に戻した後カメラに電撃を送り破壊した後錬金術で床や天井・壁を修復しその日は終わった。

#### 第四話（後書き）

一応初日の授業（仮）終了

なんというか微妙でした

描写というか表現の仕方がまだまだですね。

色々と書いていて気付かされます。

感想・誤字脱字などいつでもお待ちしております

## 第五話

そういえばクラス名簿を見た限り面白そうな人がいたからその人の元へと向かおうと思っていたんだ。忘れていた

私はエアトレックをはきその人の元へと走り出す

向かうは研究室へだ

研究室前へと到着

とりあえずノック。マナーは大事ですからね

「どうぞ」

「失礼しまーす」

「あ！先生どうしたんですか？」

「いやちよつと興味があつたものですから」

「見学ですね？どうぞご自由に」

「あと絡繰さんと同じガイノイドを作りに来たんです」

「ああ、それなら1カ月を要しますけど？」

「パーツだけならありますか？」

「え？ありますけど何するんですか？」

「組み立てるんですよ。」

「簡単に言わないでください。」

「簡単だから組み立てるといふ言葉が出てくるんですよ。」

「簡単に？そんなばかな・・・。」

「ではパーツを提供していただいて5分で組み立てて見せましょう」

「5分！？不可能でしょうがその提案を受けましょう。」

「ではお願いします。」

パーツを山積みにしていく葉加瀬さん。ああ、そんな手荒にしちゃいけないでしょう

「ではちよつとの間外に出ていただだけますか？」

「いいでしょう、ですがたぶん無理ですよ？」

「気にしないでください。」

「では失礼します」

ボタン。

ふむ、パーツがあれば錬成ができる。

私は両手を合わせた後パーツの山に手を当てる。

あら不思議、ガイド体が完成しました！

「葉加瀬さん、完成しましたよ？」

「そんな馬鹿な……。本当に完成してる……。ありえない！どんな方法を使っただんですか？」

「中身だけはちよつとできてませんけどそれは葉加瀬さんにお願いできますか？」

「え？ああ、それは明日にはできると思います。」

「ではお願いします。完成したら私に教えてくださいね取りに参りますので。」

「はい、わかりました。」

「あー、あと放熱のためのあの素材の代わりにこちらが用意した素材を使い、放熱効率が上がってますので」

「そんな馬鹿な！同じに見えるのに……。」

「パーツ代としてこれだけ置いていくので。」

「パーツは大丈夫ですよ。」

「一応頂くのですからこれだけでも置いていかないとかが済みませんから」

そういい私はそそくさと出ていき返されないようにする。ふむ、用事は終了。あとは目的だけかな。

エヴァンジェリンさんの呪いを解除し弟子入りもとい下僕入りだ。今さっきの用事というのもカードの一枚だ。決定的なのは呪いの解除になるだろう。ふつ……。にしてもあの錬成は結構賭けだったんだよねー。ちよつと失敗したらパーツだめにするし。あー危なかった……

さて……。交渉のカードは3枚か……。少ないな。まず1枚目が核鉄だ

これは前世から持ってきた物のひとつそして私の改造で魔力もエネルギーとして使える。

私が発動させると突撃槍になる。形状にもよるが私のように槍など棒状のものが出れば杖のように使えるという効果を付与させた。

そして二枚目

茶々丸2機目？である。

最後の3枚目

呪いを解くこと。

3枚目が決定的だ。

明日の放課後が楽しみだ・・・。

## 第六話

ふむ……。前世の装備を改良して魔法具を作ろう。これも切り札になるかもしれない。

確か手甲のブレイズルミナスをライトセ○バーのような光る剣付与効果は魔法・気系の物を無効化できるような効果が欲しいな……。

無効化できる人や物のサンプルがあれば……。どうしようか？

魔法具として無効化するものを作って錬成で組み合わせればいいか！！  
そうとなれば無効化できるリングみたいなのを作らねば

この素材と……。これで出来るはずだ

パリパリパリ。

錬成して完成だ！！

実験できそうな所が……。

しょうがない、結界はつてばれないようにするか。

……。結界展開完了。よし実験スタート

アーク バスタード マイ マジックススキル 魔法の射手 サギタ・

マギカ 光の一矢！ ウナ・ルークス

一筋の光は指輪に当たる直前音を立てて消え去った。

「よっし！成功！！」

思わず独り言を声に出してしまった、大変恥ずかしい。

ブレイズルミナスを錬成し直し形を細い円柱の様な形にする。その円柱にはボタンが一つだけついておりそのボタンを押すと青い光を放ち、まっすぐな刀の様な刀身が現れた。

刀身をひっこめ、指輪と円柱をすぐそばに置き錬成。多分これで大丈夫だ！

Let's 実験！

結界はまだ解除してないからそのまま続行。

台座を錬成で作りだし刀身を出しっぱなしにしその台座に円柱をセット。

3 mほど離れ再び呪文詠唱

アーク バスタード マイマジック スキル 魔法の射手 光の  
一矢！

魔法の矢が刀身の50cmほど前で音を立てて消え去る。

再び成功だ！！

これは武器としても切り札としても使える。

どの程度が限界なのかはよくわからない。だが雷の暴風ぐらいは耐えれるとみた。

イクスバーナーの限界も一回試してみたいが…。

ふーむ・・・炎圧は多分限界は・・・、50～60万Fvぐらいかな？よくわからない。困ったな・・・。

明日の交渉が楽しみだ・・・。



## 第六話（後書き）

ちなみに炎庄の単位のFVというのはフィアンマボルテージの略です。

時系列は初日の夜ぐらいですね。わかりにくくてすいません><;  
誤字脱字・アドバイス・感想があったらぜひぜひお寄せください。

## 第七話

さて、今日は快晴。交渉日和じゃないか、こんな日にこそ交渉しないと損な気がするよ

今日の格好は「様々な難問奇問を力技で解決させる秘密道具を持たないドラ○もん」すなわち執事服だ。燕尾服じゃないぞ。執事服だ（大事なことなので二回言いました。）ちなみに綾崎ハ○テの執事服を思い出していたければよろしいかと。

とりあえず交渉って言ったって話し合いみたいなもんだから相手に粗相があっちゃいけない。

水筒2つに紅茶と珈琲を入れて持つてくこうか。お茶菓子にクッキ―があつたはずだから適当に入れておくことにしよう。

これじゃあ結構大きめのバッグが必要になりそう……。魔法具としてどれくらい入れても大丈夫な白衣を作ったはず…。

色が……。まあこんなときだ何も言ってられないな。これ着て出勤しよう。

いつものカバンに核鉄とブレイズルミナス改を入れて準備完了！さて出勤せねば。

私はその扉を開け学校へと走り出す。  
相変わらずトリックを決めつつ出勤。

職員室前に到着

ガラガラガラ。

「おはようございますーす」

「ああ、おはよう。マナ先生」

「おはようございます、新田先生。早いですね」

「これぐらいどうってことないですよ」

軽い会話をしつつ席につき自分で作ったPCの電源を入れつつどうしようか考える。

そうこうしてるうちに職員会議の時間になってしまった。

「　　以上で職員会議を終わりたいと思います。」

あー終わってしまった。全然話聞いてないけど録音しておいたから後で聞き直そう。2・Aでの授業は確か3時限目だったはず。他の所でも授業あるからさっさと準備して向かうとしよう…。

時系列は3時限目終わりに　　。

「すいません茶々丸さん、エヴァンジェリンさんにお話があるのですが。」

「内密なお話ですか？」

「ええ、出来れば今日の放課後に屋上に来ていただければと思います。」

「わかりました、伝えておきます。」

「よろしくおねがいします。」

よし、完璧。

あとは放課後を待つだけだ。

そして時系列は放課後に　　。

屋上への階段を上りつつ、気配に気づく。2つの気配がある。たぶんエヴァンジェリンさんと茶々丸さんだろう。これは予想済み。扉を開け、決戦へ。

「すいません、お待たせしました。」

「用って言うのはなんですか？マナ先生」  
手厳しい反応ですな。

「こちらの要件をお話しましょう、エヴァンジェリンさんあなたに弟子入りしたいのです。」

「ほう？それなりの対価はあるんだろうな？」

「もちろん、その対価は今から話し合います」

そう言い放ち胸の前で両手を合わせ次に地面に両手をつく。

「っ！！！」

警戒の態度を見せる。だが安心してくださいよ

錬成したのは椅子3つにテーブル1つ

「どうぞ」

「ふん」

「珈琲と紅茶ありますけどどっちがいいですか？」

「手回しがいいな、紅茶を頼む」

「はい、どうぞ。」

水筒のカップを目の前に置きお茶菓子を置く。

「対価の話をしようか。」

「そうですね、まず対価のひとつとして呪いを解きましょう」

「ほう、呪いを解く……。解けるのか！今すぐ解け！」

「まあまあ、もうちょっとお話ししようよ」

「そうだな。」

「あなたの選べるカードは4つまず一つ 魔法を無力化できる武器

二つ ガイノイドロボット2機目 三つ 定期的な血の提供。

四つ 核鉄」

「一つ目の 魔法を無力化できる武器 と四つ目の 核鉄 とか言うのがよくわからんな」

「実物を見てもらった方が早いでしょう」

カバンから核鉄とブレイズルミナス改を取り出して見せる。

両方とも発動させてみる

「その核鉄の存在はまあまあわかったがその無力化のほうは全然わかっていないぞ？」

「この武器……。仮にブレイズルミナスと呼ぶことにしましょう。このブレイズルミナスは科学と魔法の融合です。無力化は魔法が、この刃の部分は科学で作り出せます。」

「そんなことはどうでもいい。だが無力化は美味しいな……。」

「呪いは今すぐここでときましよう、でないと信用してもらえそうにないですからね。」

「よし、今すぐ解け！」

ブレイズルミナスを手に取りエヴァンジェリンさんを見る

なんというか半透明な鎖がぐるぐる巻きになっている。

鎖をブレイズルミナスで切り破壊。どうやら呪いの鎖だったらしい。

「魔力は戻らんのか？」

「呪いとは無関係みたいで、ちょっとわかりかねます」

「いや、十分だ、礼を言う」

「これで信用していただけましたか？」

「ん？あ、ああ、そうだな」

「弟子入りの件の対価はどうなさいますか？」

「ああ、そうだな、無力化の奴を私によこせ」

「ではどうぞ。」

刃をしまい目の前に置く

「使い方はこのスイッチを押すだけでいいのか？」

「はい、それだけです」

「簡単だな。」

「そんなもんですよ」

「一つ聞こう、貴様の父親のことについては興味あるのか？」

「なぜ興味がわくのかよくわかりません。」

自分でわかってしまうぐらい酷く冷たい声だった

「ふ、ふふ、……ははははははははははそうか、そういう答えを出

してくるとは面白い、面白いぞお前は」

一瞬間まってからそう答える

「そうだな、稽古をつけてやる明日から仕事が終わったら私の家に  
来い」

「はい、マスター」

そっくりい終えるとエヴァンジェリンさん……、いやマスターはそ  
のまま屋上から出て行った

ふーむ……。だいぶ疲れた、交渉って疲れるものだったかな？

まあいいや、このままだと怪しまれるから錬成し直して直しておか  
ない

再び両手を胸の前で合わせ地面にあて錬成し普通の屋上に直す。  
よし、これでは片付けて帰るか。

## 第八話

ふわぁー……。今日の業務終了したー

マスターの所行って執事のまねごとしないと。

と、言うわけでマスターの自宅に到着。

「マスター来ましたよー」

「よく来たな！」

「出迎えに気合入ってますね……。」

「弟子をとるからには本気でやるからな！覚悟しろよ？」

「もちろんです！気合を入れるためにこの服装だって言うのに！」

「見た所普通の……。いや！これは執事服……。？」

「その通り！実は私は執事服を着るとなぜか気合いが入るんです！」

「ほほーう、その幻想をぶち殺す！」

「禁書目録……。」

と言うわけでダイオラマ球に入り修行。

とりあえずざつと使えるものをちよつと見せろとのことなので色々見せることに

「とりあえずマスターは知らないと思いますg「私に知らぬことなどない！」あ、ハイ……。」

「で、続けますけど……。これが死ぬ気の炎と言って……。」「なんじゃそりゃー！！！」え？だから死ぬ気の炎……。」

「この死ぬ気の炎は炎自体が破壊力をもった超圧縮エネルギーがこの形になったものです。」

「アバウトだな。」

「それくらいしかわかってないので……。^^;」

「で、次に錬金じゅー「なんだよそれー！！！」だから錬金術と言って……。」

「続けますよ？私の行使できる錬金術は二種類その錬金術法を生み出した人物の名前を取り分類されます。一種目がエド方式といいま

す。」

「方法は簡単両手を取りあえず合わせたあと錬金したい対象に両手をあてるだけです」

「そんなに簡単なのか？」

「話し合いした時にテーブルとイスを錬成したじゃないですか^^；

」

「ああ、そんなこともあったな」

「・・・（忘れられてるー・・・。」

「どうした？話を続ける」

「あ、っはい。続けますが第二にロイ方式といい、錬成陣が描かれた手袋を身につけパチンと指を鳴らすだけ、あら不思議。目標先に爆発が起きるじゃありませんか」

「使えないな。」

「真っ向否定しないでもいいじゃないですか^^；」

「後はないのか？」

「あと一つだけありますがそれは道具なので関係な」とりあえず見せろ」ハイ・・・」

「これも話し合いの時に出了ましたが核鉄という道具で、個人個人が発動させると違う物が現れます。私が発動させると突撃槍になります。」

「武装錬金！・・・ホラネ？」

「ほほーう面白い、私にも貸して見せる」

「・・・（これはフラグ！貸したら絶対に帰ってこない・・・。」

「どうした？師匠命令だぞ？」

「どうぞ」

「どうすればいいんだ？」

「武装錬金と声高に叫べばいいんです。」

「武装錬k・・・いや、今はやめておこう。」

「そうですか？よければそれ1つ贈呈しましょう。」

「ほーう、下僕としての自覚が出てきたか。」

「大変お気に召してるからじゃないですか・・・^^;」

「今日はこれぐらいにして夕食にしよう。」

「はい!」

「では自分が用意して来ますね」

「ちよつと待て、何をするつもりだ?」

「え?夕食の準備ですか?」

「茶々丸が用意してあるからいい」

「・・・マジかよ」

「その素の反応が怖いわ」

「一応料理の腕前とか他もろもろ自信あるんですけどねー!」

「それがどうした?」

「舐めないでくださいよ、ほぼ落ちこぼれと思われていたため大體自分でやらなければならずやってるうちにすごくうまくなってしまつて、一流料理人をうならせるレベルになつてしまった私を舐めていると痛い目に会いますよ」

「それは面白い、そのうち腕前を見せてもらおうか」

「もちろんですとも、見ててくださいいよ。」

そうしてゐるうちに1日が終わってしまった・・・。



## 第九話（前書き）

この話は2月前半のお話。

そう、ネギが日本にくるちょっと前のお話。

## 第九話

ハッキリ言おう。学校の担任するとか理科教諭するとかは全然大変じゃない。むしろ楽だ

魔法の一つやらを覚えるのもまだいいだろう。私は物覚えがいい方だからな、自分が言うのもなんだが・・・。

執事をさせられている件についてだ。

「おい。マナー、ワインおかわりー」

「伸ばすと食事のマナーとかのマナーと勘違いするので伸ばさないでくださいね。あと継ぎ足したのでどうぞ。」

「どうやら執事の才能があつたらしい。こんなので大丈夫だろうか？

「先生はゆっくりしててよろしいんですよ？」

「直々の指名ですからねー・・・。」

マスターはだらけている・・・。色々大丈夫なのだろうか？修行には支障がないのが不思議だ

修行内容と言えば大体は自主練習・実践が主となっている。

そういえばの話。茶々丸さんの妹となる存在を私が作りだしたわけだが、名前をまだつけていなかったな。と言う話になりその議論が白熱し結果私の案「笹丸（ささまる）」になった。

その笹丸の動力源は基本はゼンマイ・魔力・そして死ぬ気の炎の三つから構成される。ハッキリ言ってしまうと死ぬ気の炎の効率が良すぎるのが困りものだ、効率がいいので茶々丸さんの飛行航続時間より大幅に伸びる結果となったりする。

茶々丸さんの飛行可能時間は15分だが笹丸はなんと1時間半もの間飛行可能であると理論的にはなっているがどれぐらい飛行できるかはいまだ不明。というか試していないだけ。手抜きで申し訳ないと思う。

動力供給は二つ採用している。まず後頭部にあるゼンマイ+魔力の1つ目

背中にある手の形をした二つ目ハッキリ言つと貯蔵タンクに炎をためておけば1週間は持つ。ジェットやら武装を使わなければの話ではあるが。

武装の話はまた後日と言うわけで。

お？そろそろ出られるからそろそろ出て明日に備えなければ。

「ではマスター修行はまた明日というわけで失礼します。」

「おう、ごころう」

「お気をつけて。」

「ではまた明日。」

さて、帰ってプリントなどを作らないと。

あーあ、どうしたもんかなー。

笹丸のオブションパーツでも……。

「おい、てめえ金出せよ」

ん？何か言われた気がする

「何用でs「金出せよ!!」」

壁際にたたきつけられた。

肺の空気が全部外に排出させられた。

絶息

「いきなり何するんですか？」

「いやいいから金出せよ」

「いやです。」

「出せつての!」

「大声出しますよ。」

「出してみろよ」

「ワーヘンタイがいm「うるさい、こいつで刺されたいか？」

わー、ナイフが腹のあたりに食い込んでる。

長さ・形状を見る限りサバイバルナイフと推測する。

「こいつで怪我したくないだろ？なら金だせよ」

「……」

相手に見えないように死ぬ気の炎を出しナイフにそつと手を当てナ

イフの刃を溶かしておく。

思考する

まずナイフで再び脅す。ナイフの刃が溶けていることに驚く。右頬に一発ストレートを入れる。二発目にあばらを一本折っておく。反撃を火を灯した右手のグローブでガード。ガードした際に右手をつかみひねる。蹴りを一発入れ腕の骨を砕く。そして相手は腕を折られただけでは折れない。蹴りをかわし腕をつかんだまま再びあばらを砕く。

思考の世界から現実へと戻る。

ナイフを目の前に散らせる。

「な、なんで溶けてやがる！」

右頬にストレート炸裂

二発目みぞおち近くのあばらに左手でアタック。

反撃を右手でブロックし、右手をつかみつつ脇を抜け後ろを取る

右手を使えなくするため蹴りを入れ右手を折る。

反撃を取るため相手は体をひねりけりを放つが私はかわし

再びあばらに蹴りを入れ相手を蹴り飛ばす。

診断……。多分あばら三本骨折、右腕複雑骨折。総評全治4カ月。

「こんなことはせずにまともに生きる事ですね。これを教訓にして

」

「うぐぐ……。て、テメエ！何もんだ……。」

「いつかいの教師ですよ。」

「教師があばらを折るかよ」

携帯を取り出し、コールし救急車を呼ぶように言い、住所を告げる。

そのあとすぐに携帯を閉じる。

「救急車読んでおいたのでご心配なく」

「アフターサービスがよろしいようで。」

私はそそくさと歩き去っていった。

## 第九話（後書き）

次はネギが登場するかもね！  
ご意見・誤字脱字があればお教えくださいませ

## 第十話

二か月って言うのは実を言うと早いものですね。

実を言う所修行に明け暮れていたというより業務に慣れるほうが大変だったという事実。

そして本日兄さんが来日すると言う話を耳にはさんだので（迎えに行くように言われた）迎えるためにとりあえずベンチに座り待っている。こんな放送が。

学園生徒の皆さん！こちらは生活指導委員会です。今週は遅刻者ゼロ週間。始業のベルまであと10分を切りました！急ぎましょうああ、そういえばそんな週間に入ると会議で言っていましたね。

今週遅刻した人には当委員会よりイエローカードが進呈されます。くれぐれも余裕をもった投降を心がけましょう。

この時間帯は混むんでしょうかねー？人がゴム．．．いやいやいや雪崩のように登校してきますね。

やはり人がゴム．．．いやいやいやとりあえず人が多すぎる。

お？明石さんだ。

「あ！おはよう！先生、どうしたの？」

「新人さんが遅くて。」

「そうなの？がんばってね！」

手を振ってこたえる。

おっ？明日菜さんとこのかさんの隣を走るあのでかいリュックの少年に見覚えが．．．。

あれは兄さんじゃないか！

私はあわてて電柱に連続アップソウルを決めつつ3人に迫る！だが何やら雰囲気が変わり少年の頭をわしづかみし持ちあげている。推測すると、このかさんが持っている本。ちらっと見えたが占いの本らしい。兄さんは魔法使いだ、占いの話をしているのを小耳にはさみ占ってやった結果わしづかみされたのだろう。

だがしかし！

止めなければ！あのイベントだけは！！

もう、モーシヨンにはいったと！？もう少しあと1秒！

私はギリギリ明日菜さんの前に立ちくしゃみを防ぐ。

おかげで白衣が汚れてしまった。そして強烈な風が発生。ラッキー  
スケベとはこのことだ。

ミッシヨンクリア。

「お久しぶりです、兄さん。」

「久しぶり。」

「えええええ！！こんなガキンチョの妹！？こんなに違うのに？」

「兄が失礼なことを言ってしまい申し訳ないです。」

「僕は占いの結果を素直に「失礼なことに変わりはないでしょう？」  
うう・・・。」

そんな顔をして何も許す気にはなれないな、私はもとは男だし？  
あと失恋の相が出るだあ？そんなことを見知らぬ、そして小学生  
の様な子供にそんなことを言われれば誰だってああやって怒るだろ  
う。気持ちはわかる。でも抑えましようね、明日菜さん

「では兄さん、あと明日菜さんとこのかさんも一緒に学園長室へ。」

「学園長！これはいったいどーゆーことなんですか！？」

「まあまあ、アスナちゃんや」

「なるほど修行のため日本で教師を・・・そりやまた大変な課題を  
もろたのー。」

「は、はい！よろしくお願いします」

「しかしまずは教育実習とゆーことになるかのう、今日から3月ま  
でじゃ」

「ところでネギ君には彼女はおるのか？どーじゃな？うちの孫むす  
m「学園長先生、話を続けてください」わかった、わかった。」

「ネギ君、この修行はおそらく大変じゃぞ。ダメだったら故郷に帰

らねばならん。二度とチャンスはないがその覚悟はあるんじゃない？」

「はい、つやります！やらせてください！」

「……うむ、わかった！では今日から早速やつてもらおうかの。指導教員の静菜先生を紹介しよう。しずな君」

「はい」

「あらごめんなさい。」      わからないことがあつたら彼女に聞く  
といい。「よろしくね    あ、ハイ」

「そうそうもう一つ」

「このか    アスナちゃんしばらくはネギ君をお前たちの部屋に泊めてもらえんかの」

「「げ（え）」」

「ええよ」

「もうそんな何から何まで学園も「明日菜さん、私が変わります。」

あ、ああ、はい」

「それはちよつと無理があると思いますが？」

「ほー、なぜじゃ？」

「兄さんは寝相が悪く、自分の寝床と人の寝床を間違え、迷い込んだりする人を安心して部屋に置けると言うんですか？」

「じゃがしかし、他における部屋がないんじゃないよ。わかってくれな  
いか？マナ君」

「教員用の寮があるでしょうに」

「空室がないから仮という形でじゃなー」

「空室がないなら仕方ありませんが、空室ができ次第うつっていただきます。」

「わかったわかった。」

「そういうわけじゃから仲良くしなさい」

「「「失礼しました。」」」

私は明日菜さんに駆け寄り小声で

（ごめん、部屋変えてもらうつもりが失敗しちゃいました。）

（先生の気持だけ受け取っておきます。）



（そういうわけだから寝るときは気をつけてね。）

（はい。）

そんなこんな話し込んでいると我々兄妹が担当するクラス2 - Aに到着。

はあー……。また手の込んだトラップしかけるなあ。

「ネギ先生、私が先に入るので後からついてきてください。」

「わかったよ、マナ」

「いまは勤務中ですよ。」

「あつ、ごめん！」

これからネギは先生への一步を踏み出す。

## 第十話（後書き）

ネギ登場です。

まだネギ登場した回の半分くらいですね。

ご意見・誤字脱字などがあればお知らせくださいませ。

## 第十一話

side マナ

さて、この目の前にあるトラップをどう回避しようか？

最初にかかったときみたいな感じでいいか。

深呼吸

よし、やるか。

扉を開ける。

落下してくる黒板消しを回しつつ受け止め回し続ける、ワイヤーを踏み回避、後ろから降ってくる矢を左足の靴の裏で受け止め、そのままバケツを足で矢を受けとめきつた。

はぁー・・・。

そしてあからさまに平然を装う。両手を広げ

「ヘーイ！」

意味のわからないことを言つたと自分で自覚している。

「「「「「すごい！！」「」「」」」」

バケツを下ろし兄さんに入ってもらう。

「とりあえず、新しく来た副担任の先生に自己紹介していただきませう。ではどうぞ」

「今日からこの学校でまほ・・・英語を教えることになりましたネギ・スプリングフィールドです。3学期の間だけですけどよろしくお願いします。」

「「「キャアアっかわいいー！！」「」」」

「騒がないで！代表して朝倉さん質問をどうぞ」

「えーつと麻帆良新聞の朝倉和美です！歳はいくつですか？」

「かぞえて10歳で・・・」

質問タイムに入ったのもう心配ないと思われたので窓を開け自分で作った飴を口に含み考え事をする。

そういえば今後の展開はどうなるんだったかな？ふせぐべき案件は・  
・はて何だったか？

「質問は以上で終わりです。ありがとうございます」

「ではネギ先生授業がんばってください。」

そういうと私はさっさと教室を出て、職員室に戻る。

面倒なことを起こさないでくれると助かるんだけどな・・・。

時系列は放課後へ

やっとひと段落ついたし、今日はかなりグロッキーだからな・・・

おやー？兄さんじゃないか、どうだっていいか。

でもその視線の先には宮崎さんがいるが、その後ろには明日菜さんがいる。これは危ういフラグじゃないか？

実験も兼ねて助けてやるか。

ポケットから一枚のカードを取り出しそのまま手に持ちながら一声

「アデアット！」

その一言を言い放つとカードは光だし、ボンと言う音の後に飛び出した人物は自分ではなかった。

side out

side ネギ

「あれ・・・あれは27番の宮崎のどかさん・・・・。たくさん本を持つてて危ないなあ」

転ぶんじゃないかなー？

「あつ」

「！！ やっぱし！」

「きゃあああああああ！！」

風の魔法で！！

よし！この間に！

ネギは走り出し宮崎のどこを無事キャッチする

「アタタタ・・・ 大丈夫？宮崎さん」

そついい終えると僕は目の前を見る

真っ黒のスーツを着たかっこいい金髪のお兄さんが立っていた

そのお兄さんは何かのピンを引いてほおった

数瞬だった。

その何かは爆発し煙を辺りにまき散らす。

煙の中黒い何かが森の方へ向かったのがなんとなくわかった

でもあのお兄さんにマナの魔力をちよつと感じたけどなんだったんだろう……？

魔法を明日菜さんに見られなくて良かったー……。

side out

side 明日菜

「ん？あれ、あいつ……。」

ネギを見ていたはずなのに……？

あれ？なんで目の前が真黒になつてるの？

人が立っていたような……？

目の前を覆っていた闇が取りさらわれたがその真黒な闇は闇ではなくマントだったようでそのマントをはおると金髪の人物は何かのピンを抜き落とした。

その落としたものが爆発し煙が辺りに立ち込める。

何かがその煙から飛び出して行っただけなんだっただろう？

そしてネギは本屋ちゃんを抱きかかえて転んでんの？

side out

side マナ

火加減を間違った……。

1割ぐらいと思っててもかなり間違った炎を噴出したようだ。

でもこの体すっごい使いやすいし、知識まで詰まってるとは思わな

かった。

かなり便利なカードだ……。作ってよかったわー

これ麻帆良祭の時に使えるわー。

さーこれからマスターの所に行つてびっくりさせるかー

## 第十一話（後書き）

とりあえず出してみたボンゴレ？世<sup>フリーモ</sup>

マナの中身は基本的に男なのですぐに適応できるのがいい所ですね。  
あ、このカードの名前が決まってるので1週間の間にこのカード  
の名前募集します

どしどしご応募くださいませ！

そしてボンゴレ？世の名前とかこの世界での名前も募集してます  
あと他に魔法具のアイディアや服装のアイディアそして魔法武具な  
どのアイディアがあればどしどしお寄せください！

あと感想・誤字脱字などの指摘などお待ちしております！

## 第十二話

side アスナ

は？なんでネギが本屋ちゃん抱えてスライディングしてんのよ。何が起こったわけ？

「あ．．．． あんた．．．！！」

アスナがネギのスーツの襟をつかみ雑木林に引き込む。

「あんた本屋ちゃんに絶対何かしたでしょ！！説明しなさいよ！！」  
「何もしてませんよー、階段から落ちそうな所を助けたぐらいですけど．．．。」

「それだけじゃないでしょ！！絶対何かしてるでしょ！？」

「本当に何もしてませんよー」

「じゃあ今朝の黒板消しどう説明するのよ！超能力とかつかったわけ！？説明しーなーさーいー！！それともなに？超能力者でもないの？白状なさいっ！」

「僕はま、魔法使いで．．．」

「そんなのどつちでも同じよ！」

「あっ！じゃ、じゃあ朝のアレはあんたの仕業ね！！」

「ゴ、ゴメンなさい！」

「他の人にはれると僕大変なことゝゝ（修行終了のお知らせ的な意味で」

「んなの知らないわよ！！」

「むむむゝ！！秘密を知られたからには記憶を消させていただきます！す！」

「ええっ！」

「ちよっとパーになるかもしれませんけど許してくださいね」



「ギャー!!ちょっと待って!!」

「消えろー!!」

side out

side マナ

「ろー!!」

ん? 難か聞こえましたね。

「キャー!ーッ!」

悲鳴? 聞き慣れてるからあんまり反応したくないのが本当の所ですよ。

そんなことも言ってられないので駆けつけますが……。修羅場とはこういうことだったのかー。

「どうかしたんで……。コイツはいつたいどういうことだ……?」

さて、私の立ち位置は明日菜さんが右側に立ち、左側にネギと高畑さんが立っている。こいつはいつたいたいということだ……?

いつも来ている紺色の白衣を脱ぎ二人の目の前に投げつけ二人の視界を防ぐ。

そしてスーツの上着で明日菜さんの目の前に投げる。

極めつけにスモークグレネードのピンを抜いて放る

ボンッ

「ゲホゲホゲホッ」

パシン！ダン！！

壁を二つ錬成して仕切る。

幾分煙がはれたあと、ネギがかぶっていた紺色の白衣を取り去り明日菜さんを隠している壁の後ろへ行きしやがみ込んでいる明日菜さんに白衣をかける。

「うちの兄が粗相をして申し訳ないです。」

「本当にできた妹ね、アンタは」

「一応教師なのでアンタはよろしくないと思いますけど」

「ああそうだったわね。マナ先生」

「ああ、あと制服代です。」

財布から五万ほど出して手渡す。

「こんなにももらえないわよ！せいぜい一万ぐらいだし」

「うちの兄がいつも迷惑をかけていますからこれぐらい当たり前です。」

「だけd「バイトをしていつも働いている明日菜さんへの労いと慰労を込めたのでありますけど」そ、それならしょうがないわね・・。」

渋々受け取る明日菜さん。だけど他の意味を込めた五万円なんですけどね・・・。それと今はお金が有り余っているから特には困っていないからなのだけど。

「ネギ先生！このことについては学園長に報告させていただきます。」

「ハ、ハイ」

そう言い終わると私はそこを離れる。高畑先生を連れて。

後ろで言い争っていたりする声とか罵声とか聞こえるけど何も気にしない。

歓迎会は出なかったので割愛するよ!!

・・・そういえばポストに私宛になんか手紙が来ていたのだけれどなんだったんでしょうかね？

内容はこんな感じ。

「I read the material that you had sent the other day. (先日あなたに送っていただいた資料を拝見しました。)」

「I will promise this product to be improved based on this material. (この資料をもとに製品を改良することをお約束いたします)」

「I think that the package that was going to be sent after the letter that was going to be sent this time reaches. (今回送らせていただいた手紙の後に送らせていただいた小包が届くと思います)」

「Next, please receive it because of the reaching package is goods of the reward. (次に届く小包はお礼の品ですのでお受け取りください。)」

という内容だったのですがねえ。怪しすぎる……。ありえない。だってネットブラウジング（ハッキング）していたらアメリカの軍事兵器開発企業の開発していたパワードスーツに欠陥があったからその欠陥部分を文書にして書き表したあとその部分をどうすればいいかについてのアドバイスを書いたものを送りつけただけで送られてきたのが……。

「なぜにコレなんですかねー……。」

「なんでこれなんでござろうかねー」

「うわっ！！長瀬さんなんでここにいますかー！」

「いやー、面白そうなものを開けている様子だったので見させていだいたでござるよー」

「あ、ああ、そうなんですか。（なぜかこの理由で納得できるのがありえんよなあ」

「にしても素晴らしい刀でござるなー。どこで手に入れたんでござるか？」

「軍事企業にアドバイスしたらコレと謝礼金をくれたんですよ。あと小包がもうひとつあるんですがねー開けたくないんですよ。その時期じゃないような気がするので。」

「それなら別にいいでござるがー……。」

「どうしましたか？言いもどって……。」

「この刀……。一本頂けないでござろうか？」

ちなみに送られてきた刀……。というなの高周波ブレードは3本ある。そのうちの一本を欲しいという。ちなみに刃渡り85cmに柄の部分が25cmの110cmで鍔が付いていない直刀となっている。

「いやー、それについてはそれについては別にいいんですけど。ああ、そうだ。今度龍宮さんと甘いものを食べに行くのでその時奢っ

てください」

「お金を持っているのになぜでござるか？」

「この刀の代金みたいなものです。」

「あい、承知したでござる」

「今日はもう遅いので部屋にお戻りなさい。」

「わかったでござる。あとこの刀丁寧に使わせた頂くでござるよー」

「その刀はどんなことがあるうとも折れない、欠けない、曲がらないが基本コンセプトらしいので大丈夫ですよ」

「おーそれはありがたいでござるなー、後生大事に使ってござる！」

「では先生これにて失礼するでござるよ」

ドロン。

「はいはい、さようなら。」

絶対に忍者だ……。間違いない。そしてあの刀を忍者刀として使う気だ……。間違いないねえ。

うむ、大切に使用してもらうのはいいんですけどなんとというか気恥かしいですね。

さーて明日も早いのでこれで寝る事にしましょうか。

## プロローグ

俺はいわゆる普通の・・・ いや普通じゃないか

俺の職業は武偵だ。武偵っていうのは武装探偵の略で、猫の搜索から浮気調査はたまた殺人事件や銀行強盗など凶悪事件の増加に伴いふやされたっていうか国家職業みたいなものだ。

この職業は職業柄人から妬み、嫉みが多い。事件にかかわったがために闇打ちされたりとか、国家機密に関することを知ってしまったがために再び闇打ちされたりとかとか、立てこもり犯を捕まえようとして逆にやられたりだ、とかとかとか！

つまり死に安い職業だってこと。まあ俺はテンプレの如くトラックでーとか空きかん踏んでーとかではなくただの殉職。

だがしかし俺に待ち受けていたのはテンプレの如く転生だった。

まあ転生したのは2年ぐらい前だと思う。多分兄がそろそろ悪戯を始めるのではないかという歳になってきた。さて、俺と一緒に転生した者がいてそいつは俺の・・・なんだったんだろうか？まあいいとりあえず俺は知り合いというか親？の知り合いのスタンという爺さんの書斎で同僚と一緒に魔法の勉強中だ。

「そんなに魔法の勉強は面白いのか？」

「はい！（もちろん）」

「そうか、そうか。魔法学校に行った方がいいんじゃないか？」

「英雄の息子だからって機体を押しつけるような奴らの所には行きたくない」

「私も」

「そうか・・・」

そうそう俺と一緒に転生した奴の名前はアイル＝ヴァインベルグという。

こいつは俺の戦友？いや同僚で幾度となく背中を預けともに犯人を捕まえたが、俺の判断ミスでこいつを死なせたことには変わりないので本当に申し訳ないと思っている。

だが今は一緒なので俺の判断でこいつを死なせるようなことはないように気を配っている。

そうそう日ごろの鍛錬は重要だとかどこかの偉い人は言っていた気がするので俺は毎日5km（目測というか勘で）走っている。体力をつける事が今の課題だ。

体力がなければいざという時に大事な人を守れないしな。

そういえばスタン爺さんが変わったことを言っていた。それがかなり気になる。

「スタン爺さん」

「なんじゃ？」

「前に言ってた死ぬ気のなんたら話してよ」

「ああ、いいぞ」

「前の死ぬ気の炎の持ち主は聡明で物事を広い視野を保ちつつ見える人物じゃった。お主たちにもその死ぬ気の炎の系譜に紡がれている。心配するな」

「その死ぬ気の炎についていうのはどういう物なの？」

「そうじゃなー、言うなればお主たちに秘められた可能性の様なものじゃ」

「ふーん。」

ロクな情報を持ってないようだ。一応使ってみようとしているが一向に使える気配がない。

おや？そろそろ日が落ちようとしてるようだし、そろそろ帰るとしよう

「スタン爺さん今日は書斎開けてくれてありがとう」

「んん？ああ、気にすることではないぞ」

「ありがとー、じゃねー」

「ありがとうございます。」

「気をつけて帰りなさい」

ガチャ キイイ バタン

その日の夜事件が起きた。

いつもの日課で俺とアイルは家を抜け出し森の中にある開けた場所に集合し、自分が決めたルールと日課を守りつつトレーニングをしていた。

最中村の方向が妙に明るく騒がしいことに気がついた俺は単独で森を抜け村に向かうと

そこには羊の様な角を話した黒い人のようでそうじゃないものがひしめいていた

その黒い人影は口を開けると応戦していた村人にビームを放ち、そのビームが当てられた村人はどんどん石化していった。

「あああ・・・ あああああー！！！！」

俺のうめき声の様な悲鳴を聞きつけたのか黒い人影はこっちに走ってきた

「マダイタノカ、サツサトシマツシテヤル！」

俺は目の前の惨状に取り込まれていたかのようにその黒い人影の一瞬理解できなかった。

そして戸惑った末理解し俺は走り出したが所詮は幼児。

すぐに追いつかれとっさに振り向き腕を目の前でクロスさせるが所



詮幼児。思いっきり黒い人影の拳が叩きこまれる

ガッ！

その音を聞いた瞬間俺の視界は加速し

石で出来た壁を3回ほど貫きとある民家の壁にぶつかり停止した。

停止した際に強かに背中を打ちつけたため肺の息は思いっきり排出され、絶息

「カハアツ！ゲホゲホ！！」

「マダイキガアルノカ？オレノイチゲキニタエルトハコゾウ、ナカナカミドコロガアルナ。ミライガキタイデキルガアルジノメイダ。サヨウナラダ」

「偉く・・・ゲホッ！　　饒舌だなあー・・・」

「伏せなさい！！」

この状況では誰の声かは判別できないが指示通り伏せると魔法の矢が飛んできてその黒い人影を吹き飛ばした

「ガアアアアアアア！！」

黒い人影を吹き飛ばしたと思われる人物が俺の視界に入った。

どうやらココロヴァさんだったらしい、回復魔法使うわよとか言ってるから魔法使いだったらしい。新事実だ

「それより、石化をレジストして解呪しないと・・・」

「アタシはもう間に合わないわ、だけどそれだけの知識を持っているならアンタは大丈夫ね。その知識を使ってアンタは幸せに生きなさい。アーニヤにもネギにも伝えて頂戴」

「ハイっ！」

「アンタは強いね、今にも泣きそうだけど」  
「そろそろ見たいだから、はなれなさい。」

そう言つて俺を突き飛ばすとすぐに石化が全身に回り石像と化してしまつた。

「ココロヴァさん・・・ アアアアアアアアアアアアアアアアア  
！！！！」

俺は悲しみを咆哮で紛らわしつつ、これからのことを考えていた。  
そして俺は気付かなかった。とある力が使えるようになっていたことを

## 第一話

あの後俺はというと腕は骨にひびの入った状態に戻された

一応はココロヴァさんの治療を受けたが魔力が足りないのか罅の状態にしかならなかったのが現状だ。

再び自分の状態を確かめるためまだ動かず目を瞑り瞑想のようにしている。と魔力とは別の力があるのに気がついた。端的にいうと燻ぶる炎みたいなもの

目を開けてみると視界が妙にクリアなのに気がつく

額を触るとほんのり熱い、そして炎を手宿すイメージをするとイメージ通りに手に炎が宿り自由に使えるようになっていた。

そんなことに気を取られている暇はなかったことに気づき再び歩み出すとは言っても目指すは小高い丘だけだ。

とりあえずダッシュすつけど腕にダメージのかからないように走る。走っても腕にダメージ来ることってないけどね

走ること5分ほどで小高い丘に到着。死ぬ気の炎を使ったせいか気絶してしまった。

「知らない天井だ」

テンプレの如く呟いた後、起き上がろうとすると全身に電撃が走ったように起き上がれなかった。

「っ！！」

医者の話によると腕のひびは1週間もすれば元通りらしい。あと全身が筋肉痛を起こしているらしくこちらでも1週間もすれば問題なく動けるらしい。訓練のおかげかもしれない。

「コンコン　失礼するぞい。」

「どうぞ」

「メルディアナ魔法学校の学校長をしてる者で、君ら兄弟の祖父に当たる」

「へえそうですか、それがどうかしましたか？」

「それがのお、君らには急遽魔法学校に入学してもらう」

「そうですか、でも僕にはやる必要があります。」

「それはなんじゃ？」

「教えても意味ないでしょ、僕にメリットがない。」

「そうか、それなら言わんでもよい」

「村の人はどうになりましたか？」

「村の人はまあ大丈夫じゃぞ」

「へえ」

「体に触るじやろうからわしはもう行くことにしようかの」

これ以上言うことはないという風に病室を出て行った

それから1週間という物全然人も来ることはなく（看護師さんぐらいは来たけど）静かに過ごすことができた。

退院した俺は3日遅れの入学と相成った。

とは言っても何もすることがなかった。いやあったけど。ほとんどスタンさんの書斎にて読んだ物を覚えてあるから大体はわかるし、ついていけるわけで。練習したのは炎の使い方と影の転移の仕方と影の倉庫の練習だね。

あ、あと口調が変わっちゃってさ。色々と混乱招いたみたい。どうだっていいけど

あとホームセンターに行つて20？のバーベキュー用の炭を買つて言ったら驚かれちゃってさ、まあわからなくもないけど。その後適当に林にもつていって錬成してダイヤモンドにして売却。そのころには影の倉庫もできるようになってたしマナーを普通にしまつて売

らずに残しておいた奴もしまつてある。なぜかって言うともあアリアドネーに行ったら活動資金にでもしようかと思つて残してあるだけなんだよ。そうそう、なんていうか俺には仕立ての才能があつたらしく、服とか作るのがすっぱうまいわけ、この才能使つて武装とかできたらいいな一と思つてゐる。この一年なつたことと言えばそれぐらいかなまあその一年は割愛するよ

「校長一、そろそろ春休み終わっちゃうね一。」

「そうじゃの一、春休みが終わろうとしてゐるのになぜお主は学校に来ておるのだ？」

「そりや寮生活だし、後話があつたからかな。」

「話というのを聞こうか。」

「アリアドネーに留学しに行きたいから紹介状とかその他もろもろよろしく、話は以上だから失礼するね。じゃあまた！」

「待て待て待て一ゐ！話はわかつたがの一ちよつと待つてくれんか？」

「いやだね、僕の準備が整い次第僕は行くよ」

「も、目的だけでも教えてくれんか？」

「いや、だから留学だつて一の」

「他意はないんじゃない？」

「ないっちゃあないし、あるっちゃああるんじゃない？」

「どっちなんじゃ！」

「どっちでもないよ、一応言つておくけどふざけてないから。」

「そうか、明日には書き終わつてゐるじやろうから取りにきなさい」

「へーい、失礼しましたよ一と」

さ一マフィア（というなの便利屋）再興と仕立て屋稼業を始めるよ（予定）

## 第二話

翌日。

「よつす！校長取りに来たよ」

「うむ、ちよつと待つのだじゃ」

「あいよ」

校長は何やら引き出しから二丁拳銃と一対の手袋とどこかの制服上下とボックス七個と指輪七つと封筒2通とどこかの女子用の制服を取り出しやがった

「何コレ？」

「渡す物じゃけどなにか？」

「なにかじゃないよ！何この制服！ボックスと指輪の関係性を端的に述べよ！」

「指輪とボックスはスタンにしかるべき時まで預かっておいてほし  
いと言われての。制服はまあ気にす」(ボタン！)失礼するよ！  
おお、来たようじゃの。それでは説明しようかの」

「まさかと思うんだけどさーアイルもつれてけというのか？」

「H A H A H A そのまさかじゃ」

「ふつざけんなよ！曲がりなりにも俺は男だぞ！！しかも足手まとい  
とはいわねえけどそこそこ危険な留学なんだぞ！！」

「本人の希望じゃし、まあ一人加わろうとも変わらんじゃろ？」

「何戯けてる暇があったらさっさと仕事しろよ、ったく。」

「これからよろしくねー、マナ」

「わかったよ、勝手にしろよ・・・」

それよりも良く見るとあの制服武偵高の制服じゃん！なんでもっと

るん？

「それより時間じゃないの？」

「え？本当だ！行くよ！」

「え？ちょ！何？」

「手だして！ほらほら早くしろって」

「え？え？何？」

「ツチ！もう、早く手エだせっての！」

「うん」

すぐさま手を握ると額から炎が噴き出し、握ってない方の手から思いつきり炎を噴射し校内を駆け、玄関で靴を履き替えると同じようにゲートポートに向かう。

「ちよつと！早すぎるよ！！」

「箒より早いんだからいいでしょ？」

「そうだね・・・」

これ以上の反論がない所を見るとあきらめたようだ。俺の勝ちだな！！

ゲートポートについたが人は少ないみたいだ

知らん人と話したけど普段はもうちよつと多いようで今は時期が時期だけに少ないらしい。

「おーい！ゲートポートが開くみたいだ！みんな魔法陣の中に集まってくれ！」

「余裕だったね」

「そうだね」

俺たちも移動を開始して陣の端のあたりに移動する。

ほどなくして陣が光だし、目の前を覆い尽くすと目的地に到着していた

預けたものなんて大したものではないが一応取りに行くことにしよう

「マナ・スプリングフィールド様ならびにアイル・ヴァインベルグ様ですね？」

「はい」

「杖・刀剣など武器類はすべて封印箱の中にあります。強力な封印でゲートポート内では会場できませんのでご了承を。」

「はいはい、杖とか持つんだったら武器類の許可証とか必要になりますませんか？」

「MMでは武器を携帯する場合許可証が必要になります。こちらで発行していかれますか？」

「是非お願いしようかな」

「はい、ではこちらの書類に必要事項をお書きになってください。御連れの方もお書きになりますか？」

「そうしようかな」

御一行書類書き込み中

「記入漏れはありませんね。では武器携帯許可証をお渡しします。ハイどうぞ。」

「ありがとうございます」

「さて、最初の目的地は新オスティアかな」

「そうだね、まずは向かうでしょうよ」



「はい、再び手エ出して」

「まあたあ？」

「しょうがないじゃん、俺しか使えないんだし」

「恥ずかしいんだけどなー」

「それも慣れれば問題ないってさ」

「そんなもん？」

「そんなもんそんなもん」

恒例と化しつつある会話をしつつ手を出して手を握ってくれるまで待つ

もうしょうがないなーとか言いつつ手を握る辺りがちょっと可愛かったりする

手を握ってくれたのでそろそろ向かおうと思う

（縮地无疆・・・！！）

半径2mが円形にひび割れた後円形をクモの巣のように縦筋の亀裂が入り飛び立つ。

（距離は大体1万1000キロ・・・続くかわつかんねえなー）

地上から約45度の角度で縮地无疆をしたので地上に少し力が逃げてしまいあまり飛距離が伸びずに大半が死ぬ気の炎による飛行に相成ったわけである。

「ふーっ・・・あー」疲れたあー」

「あんな速度で飛ばなくなたっていいじゃない、もう！」

「スカっとするでしょ？」

「まあしなくもないけど」

そう言ってそっぽを向いてしまった。どうやら機嫌を損ねたようです  
「奢ってやるからなんでも食べていいよ」

「やったー!!」

「店員さん! おお、来た来た。俺はとりあえずアイスコーヒーを頼む」

「私もアイスコーヒーとこのチョコケーキ1つお願いね」

「はい、かしこまりました」

営業用とわかっていても晴れやかな笑顔だところちも気分良くなるよね

こんな対応がこの店の人気の高さのだろう。

店にはかなり人が詰まっておりここまで来ると多少暑く感じてくるほどだ

この店の繁盛の訳は多分飲食店としての質の高さと営業用とわかっていても魅力的な笑顔だろうと俺は判断した。だがしかし、賑わい過ぎて熱い……。そんなことをつらつらと考えていると注文の品を持ってきてくれたようだ。さっき注文を行った店員さんが戻ってきた

「そうだ、コレチップね」

「ありがとうございます」

「そうそう、聞きたいことがあるんだけどいいかな?」

「なんなりどうぞ」

「ボンゴレっていうマフィアについて聞きたい。」

「!! そのことについてはお話しできませんね」

「そう、なら信用のおける情報屋を紹介してほしい。ああ、あとこれチップね」

「それなら3軒先の路地裏にあるタクティクスロジックという名前の武器屋の店主に聞くといいですね。ではごゆっくりおくつろぎください」

「ん、おいしいっ!」

「それは良かった」

にしても人が多い……。これだけの数の人がいると気配に気を配る

とかできそうにないな。

だけどこの人の中でもあり得ないくらいこちらを直視してる人がいる。視線ぐらい気付けないと魔法使い失格だよね（笑）

でもその人の視線にヒリヒリするような感覚が含まれているから多分刺客か暗殺者だと思うな。

たぶんこのカフェでボンゴレの話をしたから衛兵に聞かれたんだと思う。

対応が早いなー、これだと武器屋行くよりも宿屋に行った方がいいかもしれない

「そろそろ勘定をして店を出ようと思うんだけどどう思う？」

「いいんじゃない？私も食べ終わっちゃったし」

「んじや行こうか、お姉さん！ここに勘定置いておくね！」

「またのおこしを心よりお待ちしております」

「ああ、そうだ、ギルドってどこにあるかわかる？」

「こっちは逆方向に五軒行った所だよ、この並びだから忘れないで。」

「オツケー、あと宿屋は？」

「それはまた逆方向に二軒行った所で向かい側だから覚えてねー」

「ありがとう、また来るかもしれないから」

「気をつけてねー」

「「はい」「」

俺たちはまず宿屋に向かった。

「ハイいらっしやい。珍しいね子供二人旅とは・・・」

「ちよつと留学しに来たんですけど留学するまで期限があるので見て回ろうかと思ひまして」

「何泊泊まるんだい？」

「とりあえず一泊」

「二人で使うかい？」

「とりあえず二つベッドがあると助かります」

「わかったよ。じゃあ150Dpかな」

「はい、これでたります?」

「ああ、足りる足りる十分だ」

「今の時間だと夕食しかとれねえけど大丈夫か?」

「大丈夫です、心配ご無用ってね」

「二階のA-204号室だ、自由に使いな」

「ありがとうございます」

「あと俺のことはマスターと呼んでくれ」

「わかりました、僕のことはマナでよろしくお願いします。じゃあそれでは。行くよ?」

「え?ああ、うん」

ぼぼついていけない領域を見ているかのようにぼーとしちゃって何をしているんだか。

「やっと休めるー」

「何もやってないのに何を言ってるんだか・・・」

「でも緊張するんだものしょうがないじゃん」

「まあいいや、ちよつとギルド行ってくるからここよろしく。」

「うんわかったよ。」

実を言うについてきている人の始末だったりするんだけどね。

「ちよつと街を見えます」

「氣イつけてなー」

背を向けて声の方向を向かずに片手だけで返す。

適当に歩きつつ裏路地を目指す。ここまで徹底して気配を消して視線だけ残すのってすごいと思うのは俺だけか?

「ねえ、そろそろついてきてる理由聞かせてほしいんだけどなー」

俺はコレが戦闘へとつながるとは微塵も思っていなかった

### 第三話

「ねえ、そろそろついて来ている理由を聞かせてほしいんだけどな」

「なんとなくだけど盗賊みたいな人が来てることはわかってたからこうやって裏路地まで来たわけだけど・・・ハッキリ言うとな面倒だよな。」

振り返らずに返答を待つ、多少の緊張があるから少し長く感じる。

「そんなの至極簡単、お前の着てる服から貴族出身だと思ったからさ」

「そんなにいい服じゃないと思うけどな、まあいいやそれで？何したいの？」

「身ぐるみ全部置いてきなそうすりや命ぐらいは勘弁してやるぜ？」

「そりや無理だよ、お兄さん。僕は一応留学しに来たからね」

「へっそりや災難だったな、世の中そんなに甘くねエんだよ。」

「甘くないことについては概ね同意見だね、まあ災難だったんじゃない？多分ね」

「ふっ、そうだな。野郎どもやつちまえ！！」

その頭領と思しき人物からの号令で体格のいい男たちが一斉に襲いかかってきた。

5分後少年以外には立っている人影はなかった。

血の池にたたずむ少年はどこかそこら辺に転がっている石ころを眺めるように転がっている死体を眺めていた。自分のやったことをいまいち理解していないように。

「かはは、傑作だぜえまったくよー似た感じと思ってよってみれば

こんな所に来るとはなー」

「うなー、まじっすか。なんというかあれですねー、私が『はずれた』時みたいですねーそう思いませんか？人識さん」

「そうだなー、っつーかその現場見てねエから何ともいえねえっつの」

「誰？」

「自分から名乗るのが礼儀っていう物だと思っぜ？」

「マナ・スプリングフィールド」

「マナねえーゲームでよく聞くマナですかー？ってな嘘だよ嘘。人の名前でギャグとかいわねエから」

「名前教えてもらってもいいですか？」

「零崎人識っていう殺人鬼だ、覚えなくていいぜ」

「同じく零崎舞織です」

軍服の様なものを着て顔面刺繍をした人が零崎人識さんで、赤い二ツト帽の女の子が零崎舞織さんらしい。

「ああ、そうだ、言い忘れてたぜ、こういう現場って初めてだからどういえはいんだろーな舞織ちゃん」

「普通に言えはいいんじゃないですか？人識さん」

「じゃあ普通に行きますか」

「少年「家賊にならねえか？（なりませんか）」」

「多分僕も『外れたん』だろうね」

何というか理解できた、本能っていうか勘が働きかけるのかこの人たちと俺は同じにおいがするっていうのがわかってしまった。だからこそ俺はこの人たちの言葉を受け取り家賊になったんだろー。なんて言うか多少気恥かしいものがある

「そう、俺たちは外れた者同士ってなわけだこれからよろしく頼むぜ」

「よろしくなんです」

「そうだ、留学しに行くんだけどついてくる？この魔法世界にいるってことは多少使えないと辛い？」

「そんななくなつて生きていけるって」

「そうですよ」

「女の子とイチャイチャできるんだぜ？自分も女の子になんきやいけないけど」

「へー来てる限りパラダイスであるこのには変わんねーけど、俺が女になんの？」

「そうそう、そういう魔法のかかった飴玉があるわけだね。高かったーマジで」

「面白そうだしいつちよ行ってみつかねえ、なあ舞織ちゃん？」

「確かに面白そうではありますね人識さん」

「意見はまとまりましたか？御二人さん」

「先導頼むわ」

「あいよ、それよりなんて呼べばいいの？俺より年齢が明らかに高いわけだし」

「呼び捨てでかまわねーよ」

「右に同じくです」

「とりあえず武器屋に言ってもいいかな？」

「構わねーぜ、こっちも武器使い切っちゃまって足りなくなつてたんだ」

「私には関係ない事ですな」

「羨ましいぜまったく」

俺はどうやら踏み外したらしい、まあ別にどうってことはないと思う俺の判断はそのうち間違いだつてことに気がつくのは大通りに戻つてからのことだった



### 第三話（後書き）

零崎になってみました。

なんというか面白そうだったんです

俺の気まぐれだったんです

零崎とか関わってみたらおもしろうだと思ったんです

俺の勝手な妄想につきあってくれただけでいいです

俺の妄想につきあってくれる方は次回もよろしくお願いします

無理に零崎にしてみました申し訳ない

あと戦闘描写が全然なくてごめんなさい

この二人は零崎一賊が壊滅した後1、2年ほどたってると思ってください

## 第四話

僕ことマナスプリングフィールドと零崎二人組はタクティックスロジックっていう武器屋の前にいます。外觀がやばい。

ボロボロなんだけど・・・大丈夫なのこれは？魔法の矢1発で壊れそうなくらいもろそうな壁してるよ・・・

中は大丈夫だろうと言う希望を持ちつつ僕ら一行は中へと入った  
カランカラン

「いらつしゃい！どんな武器を探しに来たんだい？」

「おっちゃんナイフあるか？」

「あるぜー、これは素晴らしい一品でなー」

（どうだっていいんだけどなー、結構値の張るものばかりだし・・・）

「マナー、マナー！おい聞してるか？」

「ああ、ごめん考え事してたわ。で、何？」

「この五本買ってから金よろしく」

「んーわかったよ」

（話じゃボンゴレのこと聞きたければここに行けっていう話なんだけど・・・。）

考え事をしながら品物を眺めていると目に入る刀が二本

「ねー、おじさんこの二本の刀欲しいんだけど」

「まあ片方が売ってやってもいいがもう一本はやめときな」

「なんで？」

「この刀はな、なんでだかは知らんが触ったものを氷漬けにしちまうんだよだからやめておけ」

「試すのはいいんでしょ？なら試させてもらっぜ」

「おい！本当にやめて「全然凍らないじゃないか」凍らない奴がいた・・・だと・・・!?」

「この刀二本分の代金置いておくぜ」

「お、おう・・・」

「聞き忘れてたけど、ボンゴレというマフィアについて教えてほしい」

「ん？ああ、いいぞ。あのマフィアの者達は本当にいい奴らじゃったなー、あいつらはファミリーの者であろうとなかろうと目の前で危険な目にあっている者を保護しファミリーに加え守っておったんだ。世間一般ではマフィアなどと呼ばれていたがあいつらは絶対に違う。マフィアなんぞという物ではないマフィアなんぞという枠で押しとどめるには惜しい存在だ」

「ふーんありがとうおじさん」

「その程度のこととて礼を言われることはない」

「あとそのマフィアの人たちに連絡がつくなら教えてほしいんだけど」

「んー？連絡か？そんなものいつでもつくがどうしたんだ？」

「なら伝えてほしい」ボンゴレを再建する、2日後夜12時にアリアドネー魔法騎士団候補学校近くに集合されたし目印はオレンジの炎」と

「わかったぜ、必ず伝えといてやるよ」

「全員にですよ？お願いしますよ」

「わかってるつての！」

その後軽く談笑し、宿屋に戻った

金だけ渡して宿屋に零崎二人組を泊め翌日に出発することに決め、夕食を食べ就寝

その日の夜珍しい夢を見た

「なんだこりゃあ、動ける夢とかマジ珍しいな」

「こんばんわ、ご主人」

「はあ？何を言うんだこの美人は」

目の前で挨拶をしてきた青を基調とする着流しを来た美人さんが現れ、しかも御主人などと呼んでくる次第。どう見ても俺の深層心理にある欲望って奴ですな本当にありがとうございました。

本当に美人だなー、良く見ると目とか鼻とか整ってるし纏めた髪が雰囲気にあってて引き込まれる感じなんだよ。

「私はあなたの持つ刀に宿る精霊だよ、名前はないけどね」

「はー、精霊ねえまああれか俺の深層心理がこのような夢を見せるんだろうな。きつとそうに違いない」

「いやいや、私が夢の中にお邪魔したのですよ」

「うん、その精霊さんは俺に何用かな？」

「私は代々ボンゴレからボンゴレに引き継がれる刀なのです、こんな形で出会ってしまいましたがあなたが本当のボンゴレのボスなのです」

「へえー引き継がれるべくして引き継がれたというわけ？」

「まあそんなところです」

「じゃあ名前でもつけよう呼びにくいし、そうだなー吹雪とか？」

「いいですねーありがとうございます御主人！」

「じゃあ吹雪よ、これからよろしくな」

「はい御主人！それより朝みたいですそろそろお起きになってください」

「あいよ」

最後に振り替えると赤くなって俯いてる吹雪の姿が視界の端にあった。

「おはよーマナ！」

「ん？おう、おはようアイル」

「はいるゼーマナ」

「おじゃましーす」

「そろそろ出発する？」

「そうだな、出発しよう」

「行こう行こう！」

「そうしましろう」

俺たち二人組＋零崎二人を加えた一行は階段を下り宿屋を後にし影の転移を何度か繰り返し

アリアドネー魔法騎士団候補学校に向かった

アリアドネー魔法騎士団候補学校についたのはいいんだけど・・・  
すぐく・・・囲まれてます・・・

「あんたら何者よ！」

「不審者よ不審者！！」

「いや、そんなことはないんだけどさ」

「じゃあ何者よ！！」

「とりあえずこの手紙を総長さんに渡してほしい」

とりあえず俺とアイル分の手紙を渡して身柄確保

「とりあえずわかったわ、渡してくるわ」

「あとの二人はなんなの？」

「いやーちよつと事情があつて連れてきたんだ」

「総長が呼びだから4人ともついてきて」

（もどつてくんのはえー・・・）

「やっとうですか」

というわけで総長室に到着

「扉でけえー・・・」

コンコン

「（　開いていますよ」

「「「「「失礼しまーす」「」「」」」」

「メルディアナ学校長から連絡を受けています」

「それはありがたいです」

「とりあえず2人は受け入れますが残りの二人はー・・・」

「そうっすねえーこれでどうっすっか？（コトリ」

机にダイアモンド直径20cmほどの塊を置く

「裏口ですか？」

「いいえ、僕らと同じく3年通わせていただければ結構です」

「そうですか、それならばこれでお受けしましょう」

「「「「「ありがとーございまーす」「」「」」」」

「「「「「失礼しましたー」「」「」」」」

「一応留学は成功したけど再建はどうなるのだろうか  
このことだけが頭を離れず頭を悩ませていたのだった

## 第四話（後書き）

今回買った二本の刀について

### 1：研無刀

「斬る」よりも「破壊する」事を目的として硬度と重量を増加させた刀で、「切れ味」そのものは皆無である。研無刀の鞘も本体の重量に耐えるため、本体と同等の強度を持っている。（[wikipedia](#) マンガ「斬」より転載）

### 2：氷刃【雪月花】

今作に出てくるこの氷刃【雪月花】はボンゴレボス候補からボスにふさわしい人物を選び出すために作られた精霊の宿る刀。刀を抜くと空気をも凍らす冷気が噴き出す魔力を流すと切れ味、強度が増す。

## 第五話

俺たち4人の編入から2日後の深夜零時

俺は上空約100m程度の所で炎の強さをちょっと強めにして目印になるように待機しているわけだけど、寒いね

夜だし100m程度とはいっても空は空で変わらないわけで。

とりあえず氷刃【雪月花】だけは腰に差してきたけど

「くあ・・・」

（やべえ、眠い）

多少眠気眼をこすりつつ騒がしくなってきた下の方を見ると人ばかりができていた

一応降りて話をしてみると14代目ボンゴレの時の構成員たちみただ

「再建するから手伝ってほしい」

「はあ（呆然）」

「えーっと詳しくは俺の方からっていうか俺からしか説明できないよね、とりあえず説明していくよ」

「・・・おう、頼むぜ」・・・

「ギルドっていう形で再建するから」

「おいおい、何言ってるんだ？俺たちはマフィアだぞ？ギルドなあ？そんなあまちゃんみたいな真似してられるか」

「おいおい、口を慎んだ方がいいんじゃないか？そういう風に意見を言ってくれるのは有難いんだけど僕の主張を聞いてからにしてほしいんだけど、OK？」

「ああ、わかったよ」



「ボンゴレの成り立ちっていうのは自警団だったわけ、自分たちの街を、その住む友達、ご近所さん達を守るために発足したのが始まりだって聞いている。だからマフィアという形は僕の目指すボンゴレには合っていないだから僕はギルドという形でボンゴレを再建することに決めたんだ。」

「小僧の主張はわかったが、どうしてもそうじゃないとダメか？」

「お金も稼げるし一石二鳥でしょ？」

「わかったよ俺たちはお前に忠誠を誓う」

「いいやー、別に忠誠なんていらないよ。必要なのは結果さ」

という軽い感じで再建を始めたボンゴレだがほぼ動きがない。動きがあったとすればボンゴレのギルドメンバーが増え支部が増える程度のこと

1年ほど割愛するよ

さて、ギルドメンバーも増え支部も増えたわけだが。

魔法世界に支部を置くのも限界のようなので旧世界に進出しようと思う

魔法世界に置いた支部はというと2か所程度だが支部がまた支部を置いているためほぼネズミ算式に増えているようなものだ。

旧世界というわけでやはりここは関西呪術教会にお邪魔しようかと思っている

「こんにちはーっす」

「何のご用でしょうか？」

「関西呪術教会の長殿はいらっしゃいますか？」

「はい、いますけどどうかありませんでした？」

「ちよつと支部を置かせていただきたくてお伺いしました」

「長と取りつなぐのでお待ちください」

巫女さんは小走りで社の中に戻って行ったがなんというか巫女服っていいよね

やっぱり巫女服は最高だね！！マジで

「こんにちわ、マナ・・・くんでいいんだよね？」

「ええ、構いませんよ」

（俺の性別疑われてる！？）

「今回はどのようなご用件でいらっしゃったんですか？」

「支部を置きたくてその挨拶とこちらの組織と仲良くなっておこうかと思ひまして」

「こちらも懇意にさせていただくよう努力させていただきます」

「こちら親書になります」

「どうもありがとうございます」

「ちょっと時間の都合でこれ以上は滞在するわけにいきませんのでこれにて失礼します」

「今度はゆっくりと話をしましょう」

「ええ、それでは失礼します」

（ふー・・・久しぶりに日本に来たんだから足を延ばすのもいいかな）

足を延ばしてとりあえずぶらつと2、3県മായി麻帆良まで来た  
はいいいけどどうして毎回毎回囲まれたり、声掛けられたりするの？  
俺は怪しい人物ですか？俺はそういう運命の元生まれましたかって  
言いたいわ

「君は何ものだい？麻帆良に何の用だ？」

「ただの観光ですが？」

あのガングロ先生見たことあるような気がするけど思い出せねーな

「そんなわけあるか！悪の魔法使いだろ！」

「頭ごなしにそんなこと言われても困る・・・」

「黒スーツに赤いローブなんて怪しすぎるじゃないか！！」

「俺のスタイルにケチ付けられても困る・・・」

「そしてその顔！その糸目とにへらつとした顔が何を考えているか怪しいじゃないか！！」

「俺の顔にケチをつけるなら生んだ親に言ってください・・・」

（あれ？拷問？言葉責め？あるえー？）

「とりあえず覚悟ー！！」

「それはなしだろ・・・」

牽制で銃での射撃からのCQCで手を取ろうとするが逆に組み伏せる

「あれえー？正義の魔法使い殿が悪の魔法使い（嘘）に組み伏せられてていいんですかー？」

「うるさい！はなs「そこまでだよマナくん」高畑先生！」

「ええつとどちらさんかな？」

「知らないのも当然か・・・ 僕の名前は高畑・T・タカミチ君のお父さんの仲間だったんだ」

「ああ、はあ、で？」

「え？」

「それがどうかしたんですか？と言いたいんですけど」

「いや、お父さんには憧れてはいないのかい？」

「はあ？育児放棄した親にどう憧れるというのですか？頭おかしくないですか？大丈夫ですか？もう話すことはありませんねでは失礼」（まったく気分が悪い・・・）

後ろでがやがや言っているようだが完全無視し一旦京都に戻り建物を買収し、内装の改装を頼み一時的に個人用転移ポートを設置させ

てもらい魔法世界とつなげそのポートから戻り留学お終わらせにか  
かろうと意気込む15代目の姿があったという

## 第五話（後書き）

ギルドについてはファンタジーとか二次創作物に出てくるギルドシステムと大差ありません。

変わっている所は

準ギルドメンバーとギルドメンバーの違いだけです

説明すると

準ギルド（ryはボンゴレファミリーに守られる者・匿われている者

ギルド（ryはボンゴレファミリーを守る者

程度です。

あと次か次の次ぐらいで原作を開始します。

## 第六話（前書き）

留学から1年後というか卒業の所から始まります

## 第六話

side マナ

卒業式が粛々と進められている

だがそんなのは関係ないように天井を眺めている少年がいる  
その顔は何かを考えているようにも見える

（石でできてるとは思えないな・・・）

（ここ建築様式は・・・）

（次の新作はどんな服にしようかな）

無駄なことを考えていた

「・・・ス・・・ファイ・・・ド！！、マ・・・プリング・・・ル  
ド！！マナ・スプリングフィールド！！」

「あー、ああ、はいはい」

「（しつかりせんか・・・）」

「（ああ、ごめんね。考え事してた）」

卒業証書の内容を述べつつ小声で会話をする校長はとんでもないこ  
とをやっていると思う。

「以上、7名の卒業式を終了する」

（かっ たつ くる しい にも 程 がある）

「ねえねえ、マナ卒業証書の修行地どこだか浮かび上がった？」

「ああ、ただだけど？」

「楽そうだいいね」

「それの方がいいかな、ほぼ修行とかいらんだけだね」

「そりゃダイオラマ魔法球に50日（五年）もこもってたら修行とかいらないでしょ」

「そうだね、お？浮かび上がってきたよ」

「何々？日本で学生をすること？」

「また学生？勘弁してほしいよね」

「なんだー、私と同じじゃない」

「つくづく僕と縁があるね・・・」

「ふふふ・・・そうだね」

（本当にコイツとは縁があるなー・・・そういえばあの子にも連絡しておかないとなー、あの子『私に仕事などで合うことがあれば事前に連絡してね』とか言ってたし）

鬱だ・・・などと考えながら自分の部屋に戻り携帯を開きある人物の番号をブッシュする

2コールで出てくれた、案外早いお出ましのよう

「ああ、迷<sup>まよ</sup>い？仕事以外でそっちに行くことになってさ、その時は案内とかその他もろもろ頼めないかな？」

「マジでか？あのいつもお前と一緒に並んで帰ってるあの子が？魔法抵抗力が素で強いマジでかー普通強くないだろ？嘘じゃないの？」

「！」

「そんな怒るなよー」

「？」

「ああ、明日にはそっちに行けるからその時は頼むよ」

「。」

「んじゃあな。」



side out

side 罪口迷

「」

「珍しく、鼻歌なんか歌ってどうした？」

「嬉しいことがあったから鼻歌歌ってるんだよ」

「いつもはそんなことねーからなー、変わったことでもあんのか？」

「ん？転校生が二人来るらしいよー」

「この時期にか？あり得ねえだろ」

「さあどうなんだろうねー」

「毎回毎回あれは勘弁してほしいもんだな」

罪口迷は麻帆良女子中学校に通う中学二年生だ

罪口出身で武器職人。マナとはビジネスライクな関係で投げる事が趣味なため対価はマナの体に武器を投げつけぶっ刺すことと多少の金品

だが、毎回大量発注するためマナの体は毎回ぼろぼろなのだ

あれとはぶっ刺す光景を毎回見せられているため長谷川千雨の精神<sup>ライ</sup>力はもう0なのだ

「趣味だもんしょうがないじゃない」

「あれを趣味と言うとはいささか趣味を持つ者に対して失礼だろ」

「しょうがないじゃない、本当だものby迷」

「みつおみたく言ってるじゃねえよ」

「ごめんごめん、ボケすぎた」

「ボケすぎたと思うならなんか奢れ」

「しょーがないなー」

などと談笑しつつカフェへと入って行った

side out

side マナ

「やっと着いたぜ日本!!」(2年前のことなど忘れています)

「ついたね!!」

「さーて転校先の学園長とか言う人に挨拶に行こう」

「そうね!」

迷いつつ学園長室にたどり着いた二人

「失礼します」

「開いておるぞ」

「どうも、修業先として受け入れていただきありがとうございます」

「いやいや、なんのなんの。気にすることはない」

「修行のために日本に来たんじゃな?さほど大変でもなかるうが頑張るなさい」

「はい、よろしく願います」

「うむ、あと警備などの仕事もあるんじやが手伝ってもらってもいいかの?」

「それは僕が請負人としての『依頼』ですか?組織にくみするものとしての『命令』ですか?それとも僕がマフィア(便利屋)だと知つての『依頼』ですか?」

「あえて言うなら1番目の『依頼』かのお」

「では条件があります」

「受け入れられる範囲でならよいぞ」

「では1つ僕に関する友人・知人・親戚や仕事仲間に手を出したら遠慮なく反撃を黙認すること、2つ僕が使用する魔法・武器・拳法・武術などの情報の開示を求めないこと、3つこちらの要求した条件に違反した場合違約金又はその場での反撃を認める事4つ体的には

もう成人だからたばこを吸うことを許可することだけですかねーアイルなんかある？」

「わたしはなにもないよー」

「まあそれくらいなら良いじゃろ」

「ありがとうございます」

「制服はどうするか？」

「ああ、それは女子用だけ用意してください。ちなみに僕の分はいらないので」

「そうじゃなー、住居は「ああそれなら場所を用意していただければ作ります」そうかー離れた所にある森に一軒ログハウスがあるので、その隣にでも作るといういじゃろっ」

「ありがとうございますー」

「うむ、では高畑君後は頼む」

「はい、二人ともついてきて」

「失礼しました」

その後教室に行くことになり多少の説明を受け高畑先生が先に入り悪戯という洗礼を見事にかわし、俺たちのことを紹介する

「今日2人転校生がきます」

「どんな子？」「どんな感じなんだろー」以下e t c

「はい、静かに」

騒がしくなり始めていた教室はこの一言で鎮まる

（一言で沈めるとかすごいね・・・）

「じゃあ二人とも入ってきて」

「ちよりーっす」

「失礼します」

上から俺・アイルだ

「……か……」

「……か？」

「……かつこいい＆かわいい！！」

「質問は朝倉君の方からしてね」

「はいはい！麻帆良のパパラッチこと朝倉和美から質問させてもら  
うね！名前・年齢・出身地・特技・趣味を教えてください。あとな  
んで男の子なのにいるの？」

「ええーっと、僕の名前はマナ・スプリングフィールドで歳は数え  
で9歳。イギリスのウェールズという山奥出身。特技はダーツとか  
投擲系のスコアマックスを出せる事趣味は読書（魔法書）で僕がい  
る理由については共学化のテストケースとして入学を許可されたん  
だ」

「じゃあ次は私だね、私の名前はアイル・ヴァインベルグ。マナと  
同じ所出身で特技は特になし趣味は料理かな」

「ええ！その外見で二人とも9歳とは……。個別で質問していく  
ね！マナ君は彼女いますか？あと好みのタイプを2 - Aの中で選ん  
でみてほしい。あとなんで大人っぽいの？」

「彼女はいないし、外見で選ぶのはどうかと思うのでちょっとそこ  
については保留で。まあ成長期が早かったんだよ」

「じゃあ、アイルさんは気になる人または付き合ってる人いる？あ  
とマナ君との関係を詳しく！」

「付き合ってる人なんていないよー、マナとの関係かー一言でいえ  
ば幼馴染かな」

「質問に答えてくれてありがとう！ちなみに私は彼氏いないよ！」

（俺にアピールってか！！）

「じゃあアイルさんとマナくんは一番後ろの席だから」

そう聞いた後俺の方が先に動いたので必然的にエヴァンジェリンとは隣の席になってしまった。

「ええーつと僕はマナスプリングフィールド。君は？」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ。よろしくしないでいい」

「いやいや、隣だから何かと世話になるかもしれないじゃない」

「私はお前の世話をすることなどないから心配するな」

「ああ、そう？じゃあ世話掛けるかもしれないからそれだけは勘弁しておいて」

「そうか、それぐらいならいいだろう」

「ありがとね、それじゃあよろしく」

俺は波乱に満ちた転校日になるとは思ってたなかった。

## 第七話

転校初日の5時限目が終わろうとしている所だが女子校唯一の男子学生は一行として起きようとしなかった。名指しされ注意されようが寝ぼけ眼で黒板に近寄り正しい答えを書いては机に戻り顔を伏せ眠るなど修行のために学生をやらされていると言ってもなかりなりにも学生である。

そして今は起きているその原因は先ほどの念話にある。

念話の内容はこうだ

「（・・・ナ君、マナ君！起きておるかね？」

「ん？ああ、ええまあ起きてますよ」

「（そうか、ではちよつとしたお知らせがあるんじゃないが聞いてくれるかの？」

「（あ、はい。」

「（今夜の0時に君を紹介するので。その時間になったら世界銃の広場に集まってもらえんかの？」

「（少し遅れるかもしれませんがいいですかね？」

「（少し（・・・）じゃぞ？」

「（少し（・・・）ですね。わかりました、アイルにも伝えておきますか？」

「（いいや、もう伝えてあるから大丈夫じゃ。どこかの誰かと違って真面目に授業を受けてるみたいじゃしのお」

「（あはは、そうですかじゃあ失礼します」

「（そうじゃな、それでは今夜0時に」

「（はい）」

で現在に戻る。

困っている。なぜかという依頼（という名のお願ひ）を果たすた

めに一日目を消費しようかと思っていたのに、そこに警備の紹介という突発的イベントが組み込まれ予定表が狂ってしまったからに他ならない。要するにじじいが悪いということになる  
まあそんなことはどうだっていいが。

罪口迷との付き合いで長谷川千雨と知り合ったわけなんだが、多少<sup>スト</sup>行動調査<sup>ーキング</sup>をしてみると丁度深夜11時から12時の間にコンビニに買い物へ行ったり散歩してみたりなどなど深夜に行動することが多いことが実地調査による結果として判明している。  
え？犯罪行為だあ？こまけえこたあいいんだよ

ああ、もうどうすればいい？まあ呼び出すのが一番なんだがそれだと結構人がついてくるかもしれないだから深夜に会うのが一番なんだが……。

などとこのような事が無限ループし始めた時不意にとある場所から声が聞こえてきたというか目の前から声がする

「あー、初めまして。相坂さよといいますこれから短い間？ですけどよろしく願いしますって言ってもきこえてませんよね？」

「……」

（ああー……なんか気が散ると思ったらこの子のおかげだったのか）

そう目の前にいるこの少女。

髪は長く腰までのストレートでこの麻帆良が制服を一新する前の旧麻帆良女子中学制服を着用している。そして最大の特徴。足がなく幽霊であること

そう、この人こそが出席番号1番相坂さよである  
俺の目算が正しければこの制服は約60年前の標準的セーラー服の





必死になって頭下げてる図がシユールすぎる。そして嬉しすぎてポルターガイスト起きてる。

必死になって頭を下げている幽霊の背後で椅子や机が踊りまわる絵ってシユールすぎるとは思わないか？俺はシユールだと思う

「ああ、そうだ。ちょっと作りに行こう」

「何をですか？」

「家」

「はあ？」

## 第七話（後書き）

更新大幅に遅れて申し訳ない。

友達に誘われオンラインゲームやってたら1週間たってました。申し訳ない

今どいう展開か迷っています

というわけでここでアンケ取ります

1：書き手のお気に入り仲間にし徹底的な原作ブレイク

2：第二主人公の登場による多少の原作ブレイク

3：もう徹底的に原作に沿って動くが、多少のイベントをプラスし動かしていく

コメントが来るまでこの小説を更新するつもりはございません。

あとこんな駄目小説家の作品に今回もお付き合いただきありがとうございます  
うございますそれではまた次回

## 第八話（前書き）

コメント一つなかったのでそろそろ再開しようかと思ひます

## 第八話

「」  
「」

ノリ良く鼻歌を歌ってらっしゃる横の相坂さん。  
とりあえず下校中だ、家作りに行かないと。

多少遠いなあー、スケボーでも持ってくればよかった

「ああー！！マナ君探したでえ！！」

振り返ると、近衛さんが走ってこっちによって来た。トテトテと走る姿がとても愛らしい。

「ええーつとー、確か近衛さんでしたよね？」

「覚えててくれたんやー、嬉しいえ」

「で、僕を探してたって言っていましたけど何か？」

「マナ君の歓迎会やるんよー、いざやるとなったらマナ君おらへんから探してんよ」

「ああ、そういうことですか。なら行きますよ」

その後近衛さんと他愛もない話をしつつ、教室に向かった  
歓迎会の内容を大雑把に説明すると教室に行つて飲んで騒いで1、  
2時間ほど騒いで怒られて解散これが俺の歓迎会の流れらしい、と  
いうかほぼ飲んでただけだしな。

「やっと帰れる・・・。」

「いいですね、ああいうの」

「大丈夫さ、多分味わかるよ」

「本当ですかー？期待せずに待ってます」

「そうするといいさ」

やはりまだニヤニヤしている。よほど自分の存在を認識できる人物が嬉しいのだろうか？やっぱり生きてる人間としては幽霊の気持ちには理解できるわけがないのでよくわからないが最終的な帰結なのだろう。

そうこうと考えているとエヴァ家の前に到着し、とりあえず挨拶は重要だろうと判断し、あいさつしに行くことに急遽決定し。インタホンを押した

ピンポーン

扉越しに誰かが近づいてくる足音がする  
歩いてくる人物は扉を開けずにこう訪ねてきた

「どちらさまでしょうか？」

「隣に越してくる予定の者なんですが、ご挨拶に参りました」

「今開けます マナ様でしたか、隣に越してくるとはどういうことでしょうか？」

「ああ、言葉が悪かったですね。今から作って越してくるって意味です。後これは粗品ですけど、どうぞ」

という言葉と共に、20年物のヴィンテージワインを手渡す。

「ありがとうございます。今後ともにご贔屓に」

「いえいえ、こちらこそご贔屓にお願いします」

ここで会話は終了し、家建築の作業に移るため背を向け移動を始める

キィィィ、ボタン

背後で扉が閉まったのを確認し、着ている赤のロープの内側に手を伸ばしつつ無詠唱の戦いの歌を発動し全体的な筋力強化後に鉄筋と雪月花を取り出して、鉄筋をそこら辺においておく。

「吹雪ー、どれくらいの魔力込めれば木切れるの？」

「適当でいいと思いますよ」

「本当に適当だな」

「ハハハハハ」

「はぁー……。」

横に一闪、二閃、三閃と次々に薙ぎ払っていくたびに木が次々と切れ倒れていく。

約一五本ほど斬った所で切るのをやめ、残った切株を引き抜くとそこに座り込む

座り込んだかと思えば、ロープの内側に手を突っ込み木材を適当に次々とロープの内側から取り出し、木材の山が2mを超えた所で取り出すのをやめた。

「こんなところかな。」

「わぁー、魔法使いみたいです。突然刀だして木を切っていたと思えば切株を引っ抜いて、その次には木材出すなんて忙しい人ですね。」

「まあ魔法使いだしねえ……。」

「え！？魔法使いだったんですか？」

「驚く所じゃないよ、もっと驚くことがあるだろうし」

相坂が次の言葉を発する前に手を合わせ、地面につけ錬成する。

なんとびつくり、ログハウスの完成です。

「（啞然）」

「さあ、ゆつくりしようぜ。体作んなきゃいけねえし。」

「あ、ああ、ああありえない！！」

「よくないねえ、目の前の非現実を受け入れがたいからって拒否するのは良くない。何事も受け入れていかないとこれからの非現実とは現実となり、非日常は日常になるのさ」

なんて嘘みたいなのが口から出てくる事自体に驚きつつ、それを隠しながらローブからものを取り出し梱包された自分の衣類や魔法具などをリビングに置き、自分の脳内にある設計図の通りに作れているか確認しに全部の部屋をとりあえず回ってみる事にした。

「案外、錬成って簡単なんだな・・・。」

独り言を口にしつつ自分が作った家の完成度に驚いていた。

この家の構造はと言えば地下一階に七部屋、一階に三部屋、二階に二部屋という構造だ。

俺は階段を下り左に曲がると左右には三部屋ずつ客人用に作った部屋があり廊下の突き当たりに隠し扉を作りその奥に魔法球を置く予定なので、置きに行き0時近くになってきたので相坂をこの家に残らせ警備担当員たちに挨拶しに行くことにした。

## 第八話（後書き）

久しぶりだったので長文を避けました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6661p/>

---

ネギま！ 武偵が転生した？

2011年7月10日02時40分発行